THE Y.W.C.A. MONTHLY

女子青年界

拾壹月號

要目

日本基督教女子青年會發行



金言

事業の根は苦きも
其實は甘し　西諺

快き刺戟
エキサイトメント

秋深し……………
今召し給ふ仁丹の如何に味覺に
胃腸に快き刺戟を與へる事よ！



三浦郁之助著

■新刊■

四六判五號活字
總假名付二百五十頁

定價壹圓五拾錢
郵送料市内 地方六錢

生活と道徳

LIFE AND MORALS

本書には、舊式を破つた、新らしき道徳が百篇かいてあります――そして思ひ切り社會の罪惡と人の短所が寫してあります――本書は甘い道徳ではありません、良藥の如く苦い道徳であります――そして道徳の源泉となる、信仰と生命が力説してあります――本書は、著者が四十年間に實驗したる道徳物語であります。

目次より

天地のことだ――三樓の生活――淺ましき人心――法然上人の念佛――宇宙の寫眞機――蝸牛の友情――苦痛に光明あり――無言の應答――不味いものを食へ慾の衝突突――草取り哲學――青年と讀書――家庭と犯罪――子供の工夫力惡人ばかりの家庭――自ら治むる習慣――一寸と筆を拜借――死は人生の終局でない

發行所

東京市麹町三丁目
振替東京七八四七

丁未出版社

電話九段六六〇

第十八巻 第十一號

女子青年界目次

大正十年 十一月號



名譽大賞金牌受領

かをりよき

千代田香油

お髪のかをり

床しく脱毛を止め、生理上内面的にツヤを増す

秋から冬へかけてお髪に油氣のなくなるのは皮下の脂肪が枯渇し毛生機能の營養が缺乏する爲ですから其れを補充する適當な油、千代田香油を朝夕に用ひ自然天然な生理的の脂肪分で光澤を増す工夫をするのが何よりも必要です。

千代田クリーム
千代田ポマード
本舗

山岸三之助

東京日本橋區馬喰町四ノ二一
電特長浪花三七九三・振東京二〇五〇〇

「診察毎朝及毎夕　但祭日及日曜之他」
院長診察　月、木、金、午前及午後六時
林、峯間兩副長は目下當院に在勤
東京市麹町區三番町三十番地（市ケ谷見附内）

電話六二番
番町五一六番

東洋内科醫院

院長　醫學博士　**高田畊安**

電話ちがさき二番

南湖院

神奈川縣茅ケ崎海濱（從停車場半里）
河野、高橋、兩副長は目下當院に在勤
院長診察　土曜日午後　入院診後應需
「診察毎朝　但祭日及日曜及土曜之他」

大阪　天滿教會牧師武本喜代藏著

第六版

歡喜に溢れて

壹冊　金壹圓六十錢郵税不要

著者二十餘年來の信仰上、牧會上の苦しき經驗あり、祈禱あり、大苦悶あり、大歡喜あり、小説に似て事實也、事實にして而かも小説を讀むが如し平易に、流暢に靈界無限の眞理を説かる「余は如何にして確信を得しや」の續篇とも謂ふべく所謂欺かざるかの記也、蓋し近時我が基督教會に現はれたる最も靈的にして最も眞摯なる宗教的、文學的産物として推賞するに足らん。

武本牧師主幹

月刊「靈化」第十六號　一ケ月金五錢　一ケ年金六十錢（郵税共）

「靈化」は何れの教派にも關係なく、何れの教會の機關でもない、聖書的信仰の高調福音主義の宣傳なり。

發行所　文書傳道會

大阪市北區樽屋五

振替口座大阪五五九二〇番

社會と新人

帆足理一郎著

新版

四六判天金五百頁餘
総布製函入
定價金參圓參拾錢
郵送料拾四錢

著者は現實の人間關係を靈化醇化聖化せんが爲めに、神を父とし、全人類を同胞兄弟と見るイエスの單純なる福音に依據して、「社會奉仕即人格之向上」たる著者獨特の生活原理を高調し、社會と個人とは世相の兩極にあらず、一人格の兩面觀に過ぎずとなし、社會の眞價を個人の內面生活に求め、彼れの心裡に活躍する社會心の抱擁力と深刻性とは直に以て個々人格の內容を組成するものと主張し、社會生活に於ける清き愛の奉仕は即ち個々品性の具體化に外ならずと見る。本書の使命は飽くまで現實に立脚して、新人の理想を指導せんとするものゝ、燃ゆるが如き著者の熱血は迸つて讀者の心胸に何等か宗教的欣求を喚起せずば已まないであらう。

サンタヤナ著
小島茂雄全譯

(新版) 哲學的三詩人

▽四六判四三〇頁天金函入
▽定價金參圓　郵稅拾四錢

ハーヴアードとコロンビアとウイスコンシンとに於ける大學講演にして古代より自然主義者詩人ルークリシアスを擧げ中世より浪漫主義者詩人ゲーテを呼び、彼等を哲學と詩との見地より批判したるものなれども同時にサンタヤナが序文の一節に『各々其時代の典型にして彼等の綜合は歐羅巴哲學の總括なり』と記す如くに、歐洲文明を歷史的に批判したるものなり。既に夙に吾が國讀書界に現はるべくして今日まで現はれざりし本書の一本をば時に燈火親しむべき時、敢て讀者諸賢の座右に薦む。

中山昌樹譯
ダンテ神曲 (三冊) 各三・五〇

發兌元　東京市麴町區隼町廿番地　振替口座東京二〇一九四　洛陽堂　(電話九段九六九番)

聖アウグスティヌス 懺悔録

中山昌樹譯

四六判五百廿頁
布製函入
定價貳圓八拾錢
郵送料拾四錢

〔四版成る〕

歐洲二千年の歴史の中人類の思想生活に最大の影響を及ぼしたのは確かと云へば云ふ迄もなく聖アウグスチヌスである。彼が思想界に宗教界に又一般精神界に貢獻せし偉大なる功績に就ては玆に贅するを要しない。而して懺悔錄は彼の靈魂の最奧最深の內的經驗を赤裸々に表白せるものにして、我等は此中に人間性の悲痛なる呻吟と共に靈魂の莊美なる凱歌を聞くのである。其は熱沙の如き情慾と清澄星の如き心靈との巨人的鬪爭史である。本譯は最近の正確なるラテン原文に據れるものにして精到なる研究的詳解を附せり。生活改造を志す者は何人も本書を一讀せざる可からず。

トルストイ著

我等何を爲すべき乎

加藤一夫譯

（十版）

▽定價參圓
▽稅拾四錢

此書程世界の人心を根底から震撼した者は尠い。此書を讀んで自己の生活を革命し、勇猛なる人道の戰士たらんことを欲しない者はない此の書の刺戟に奮起して新しい生活の道程に登つたと云ふ事。登らうとして居ると云ふことの報告に譯者は多く接してゐる。此の書の再版は更に多くの人に讀まれんことを望む。（譯者）

▼我等何を爲すべき乎（五版）▼價二、五〇

▼トルストイ短篇選集 △價三、五〇

發兌元 東京市麴町區隼町廿番地 振替口座東京二〇九一四 洛陽堂 （電話九段九六六番）


専賣特許の自働鉛筆
三十萬字
鉛心の出入自由自在で削る手數も折れる心配もなく十二本の替へ心で優に三十萬字を書くとが出來ます
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣
プラトン
シャープ鉛筆

女子青年界 第十八巻第十一號 大正十年十一月一日發行

忙はしき十一月を迎へて

河井道子

或る高官にあらるゝ方の御夫人を訪問致しました、御主人の置位よりして非常に多忙で、他人の知らぬ苦心の多い方であります。然るにいつも元氣よく謙遜的に内外に立ち働かるゝことは知人の敬服するところであります。夫人は熱心な基督者で他より之がため攻撃を受けらるゝことも往々ありますが、それらには頓着せず主義を貫徹されて居ります。同夫人が子女を教育なさる仕方も信仰を基礎とされますので其奬勵の御言葉も普通ではありません、例へば召使も澤山使つてゐらつしいますから、お子樣方が自分で手を下し、足をつかつて働くなどはたまには面倒なといふ氣分も出されて「お母樣、何故働かなければならないのですか」など問はるゝ場合に夫人は「我父は今に至るまで働き給ふ故に我も働くなり」とエス樣が仰つたでせう。神樣さへ働いていらつしやるのですから私共働くのはあたりまへの事です」と云はるゝ時は子供達は何の不滿もなく喜んで働きます、と物語られた事があります。

神つねに働き給ふといふ、此ことを始終私共の念頭におきますならば確かに秋の活動期を尚よく活かしてゆく事が出來ます。十一月は何れの方面でも實に多忙な月であります。第一食欲の進む時期學生ならば强勉

の出來る月、讀書の好時期、郊外散步の上時節、年末前に於ける實業界の重大な月、各教育慈善、宗教界は其範圍其生氣を養ふに最も適當な月であります。かく數へ來つてさへ何となく身體がしまり、血かどし〳〵循環して我等に活動を促すやうな氣分さへ致します。一年中先づ最上の季節といふこの十一月に萬國基督教女子青年會が十三日の日曜より十九日の土曜まで一週間を萬國の祈禱週にあてたことは如何にも意味深い事であります。私共の健康慾、知識慾、物質慾が增長するにしたがひ靈性慾もそれに伴ひ、否それらを支配することの出來るだけに增進しなければならない時であります。

或る人が、なぜ祈らなければならないのでせうと問はれるならば、私は彼の夫人が子供方に答へられた如く、エスキリストがつねに祈る事を教へ又萬民の爲めに祈られしが故にと返事いたし度いと思ひます。爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成るごとく地にも成せ給へ」かく祈るべしとはエスの御教へであります。顧るに世は天祐にて少しつゝでも進步しつゝあるとはいへ、何處に聖旨が充分に成つて居りませう、御國が實現されてありませう、その理想に達する遼遠であります。とは申せ之等の理想實現の爲め世界全國にどれほど多くの者が盡力をなし、犧牲を拂つて居るか知れない程であります、それが博愛主義の働きとなり、正義の主張として輿論を喚起し、人道として勇敢なる行爲にあらはれつゝあります。其なら之等の美はしい活動がどうして出來たか、起つたかその奧を探ねますれば人心の至善至愛の感情より湧き出たものですが其心、其眞情は突然と湧き出たものでなく、それを堀れば其水源地が神の聖旨といふところにあるのであります。祈りは神の聖旨と人の心の間の堀拔井戸或ひは噴水の道すぢ或ひは鐵管のやうなものであります。私共も水は水道の栓を捩れば出る、井戸で釣瓶に汲めばそれであると思ひ、其水源地が幾十里先きの深山、或ひは幾百尺幾千尺下の地層より來るといふことを知らないで居る子供と同じやうに、人の心からだけ至善至愛がくると思ひ

水源地である神の聖旨よりのものが人の心に注がれ、そこより博愛、犠牲、奉仕などの水は逆る事を氣づかないやうな事が有り勝ちであります。

唯我的な私共でさへ時には他の爲めに盡し度い、何か奉仕したいといふことで忙しく、其實行で疲れるとするならば神はどれほど私共人類の爲め個人のため晝夜働きつゝあるかを思ひ感謝しなければなりません。其に倣ふには祈がなくては永久的の活動、眞の奉仕は望まれません。何故なれば神に通ふその祈の管がない時は我等の衷にある活動の貯水はじき枯れてしまひますから、人のため働くなどじきに厭になつて止めてしまいますが若し無盡藏の水源から滾々流れる泉の出口であつたとするならば、如何に水の出様が少量でも枯れる事はありません。此の精神を土臺として十一月の祈禱週を守り度いものと存じます。

思惟に世界の爲め祈る事は大膽な信念であります。祈禱自身も成長すべきもので、最初は利己主義、次は家族主義、次は國家主義、次に世界主義となります。最初は自分だけ祝福にあづかり度いとの願ひがつひに萬民が幸福になるやうといふことに變化し、進んで聖旨の天に成る如く地にも成せ給へとの祈りが出來るのであります。

十一月十一日はワシントン會議の開會當日であります、苟も平和を望む者は(平和の意味に於て解釋の差こそあれ)老若男女にかゝはらずこの世界的大會議の爲め神の御指導を祈らずに居られますまい。もし人爲的でのみこの會議があり、或は利己主義や偏狹な愛國主義の祈りで成立した會議でしたらばどうして平和が眞實に確立出來ませう。彼處に集る大勢の人々中には我利的の人も必ず多いことでありませう、如何に又奉仕的な人物がありましても人間である以上は完全を望まれません。故に私共は人間以上の指導、祝福、知慧が執權者に與へらると共に會衆一同に正義の精神、基督の御精神が勝利をうるやうに祈る事は如何に大切であ

りませう、日本に於ける基督教會は一齊に十一月十三日の日曜をこの會議の爲めの禮拜祈禱日にあてることに定まつた事も當然のことゝ思ひます、今日より我々が萬國の祈禱週を始めるといふのも又當を得た事であります。

日本基督教女子青年會は過去一ヶ年中經濟界大不振にもかゝはらず事業を維持し、發展し得るの資を與へられしのみならず、中歐の教授學生のため三千五百餘圓を集めて歐洲に送金なし得、又宗教界の大不振にもかゝはらず若き信仰ある働人を增し加へられ、會員中より多くの信仰告白者を出しました事業に對し神の惠みを感謝すべきであります。東京女子青年會の如き十一月九日より一週間を期して改築及び經常費の爲め二萬圓を募金せんとして居ることも祈禱週に適はしい大膽な仕事と思ひます、又私共は此週間に於て祈ると同時に其精神を實行にあらはし、外國より我國に在留する方々には親切を具體的に表はし、海外にある舊師、舊友には手紙を送るなど、又ロシャの饑饉、或ひは外國傳道、朝鮮の教育など世界の爲めに獻金する如き最も至當なる仕方と思ひます、特に我會員は各自萬國基督教女子青年會本部に十錢づゝ寄附をなす責任のあることを記憶して頂き度く存じます。從來は五錢でありましたが現今のやうに生活に於てさへこの數年間に三倍四倍の狂騰に對し、かゝる世界的教化の事業のため十年以上も其獻金額を增加しないなどは非理であります。依つて昨年萬國青年會の會議に於て之を倍額十錢にいたしたのであります。若しこれを讀まれた方のうち之等の爲獻金さるゝ方がありましたならば郵便切手にても結構でありますから私共の本部に御送附あらん事を御願ひいたします。祈を伴ふ獻金は少額でも寡婦のレプタ二つの如く富豪の心なき巨萬の寄附以上に神の前には貴く見なさるゝものであります。

眞の祈りには必ずそれに伴ひ目に見えた實行が表はるべきもので之なき時には眞の祈りではありますまい……お互ひに十一月は靈智體に對して充分の活躍を遂げ度いものと存じます。

神の國（二）

立教大學教授
ドクトル、オフ、フイロソフイー　小島茂雄

天國を望む時に神と人、人と人、自然と人との相互關係を研究せねばならぬ。先づ人と自然との關係を述べ、次に人と神、終に人と人との關係を述べよう。

人と自然との關係。

パウロの用ひた「身體」は有機的關係をなせる故に、天國の關係をよく現して居る。人と自然との關係は、身體丈では足りない神の國の意を現して居る。宇宙の萬有は進化してゐる、而して人間は最も高い進化の階段に居る。其意味に於て神の國と擴義に言ふのである。「神の國は近よれり」と聞いた時には、大王國は地上に來るものと政治的の意味を含めて考へられた爲、幾百の弟子を失つたキリスト自らの取るべき道は、此世の王國でなく、エルサレム城外カルバリの岡の上の十字架であつた。

鑛物界、植物界など、宇宙進化の跡を尋ねる時に、宇宙の進化が漸進的成長であるやうに、天國も亦、如斯きものであらふか。或は大きな激變として來るものであらふか。無機物から有機物に、單純より複雜へ、かくして進歩して行く。彼のコペルニクスの地動説はキリスト教會を非常に驚かした。中世紀の人がコペルニクスによつて驚かされた如く、近世の始めにダルウヰンの進化論、種の起源の説に動かされた。しかし何れもキリスト教そのものには何等の影響をも與へないのである。更に今一つはマルクスの資本論である。彼の

唯物論的經濟史觀は、最近大いに勃興して來たが、マルクスの資本論によつて、キリスト教が覆さるゝ如き事はもとよりない。宇宙人生は徐々として進み、併も動物と人との間には跳躍「失はれた環」がある。人間の出現には跳躍があつたのである。水でも攝氏四度で固形體の氷となり、攝氏一〇〇度で氣體の水蒸氣となる。或る點迄行くと革命的變化をする。子供の生れた時、空氣を初めて呼吸する時に初生聲を擧げる。一種の激變である。人が死する時丁度水が氣體に變る如く、急に他の樣式になつて行く。生命の異つた樣式に入るのである。天國の來るを、天災地變的に來ると見る人もある。時間の上に於ては徐々たる進化の樣であるが、樣式が急に變るのである。あだかも中學生女學生の身體が子供から大人に變る經路の如く、天國も徐々として來るが、又時に天災地變的激變として來る。馬哥四章廿六——卅に、穗となり熟したる穀を結び獲入れらるとある。羅馬書八章十八——廿五はパウロの文書中でも最も美しい處で、彼は天國は直ぐに來ると言つて居る。マタイ傳廿五章一——十三によれば、天國はいつ來るかよく知れないと言つてある。キリストは天國が何時來るかは述べ給はなかつた。「其日其時」を知らぬ故に、今來ると思ふこと、即ち、現在に期することが先づ至當である。

人と自然との關係は、鑛物界、植物界、動物界、人間界と「界」がだん〳〵重なり、終ひに幾億萬年かの進化をもつてるこの世界の中に、幾度か革命を重ね來れる現實の中に天國の出現を待つところにある。

古來哲學者、思想家が自然を見る時、自然を機械と見ることの中には、自由意志がない。時計のゼンマイの如きものは機械である。然るに人間は機械でないから、人と自然とを相對抗せしむる傾向がある。近來は理想主義の勃興と共に此事が少なくなつた。十九世紀の科學の進歩は時に人間と自然とを同じく見た。又マルクスの資本論に根據を置く社會主義は亦一種の機械觀である。

キリスト敎徒は理想論に味方をして居る。是は勿論正しいことである、今日の如く吾々が眼を擴く開き得るに到りてよりては、此人間は機械だと言ふ解釋にも亦其理を見出す事が出來る。アーノードベネットは此一人である。「人間機械」「如何に一日廿四時を以て生活すべきか」などの著がある。前書に依れば、人間は驚くべきものである。人間を一つの機械として見る時殊にしかり。兩方の肩の上に載せてる小さな箱、是位世にも驚くべきものがあるであらうか。此箱が自然の還境と摩擦せぬか、又如何に圓滑に行くかを反省する時に進歩を見ることが出來る。

要するに、人と自然との間に摩擦のない、調和のとれた關係を計るべきである。

神と人との關係

神と人との關係を考ふることにより、基督の天國觀の中に含まれて居る倫理觀が世俗のもの下ない、無比のものなることが知れて來る。

世俗の倫理には神がない。イエスの天國の後には神がある、倫理の後に神を有すると否とにより、如何變化があるか。何事も神の命令なるが故に善であると言ふのと、善なる故に、神が命じ給ふと言ふことは大に論理上異なつて居る。キリスト教は後者に屬して居る。

神の有無は、吾々の道徳的生活に如何影響を與ふるかと言ふに吾人に「力」を與ふ點に於て相異がある。無神論者にも道徳はあるが、有神論者も共に道徳を有して居る、此點は同じであるが、是を遂行する場合に自ら張合に相異があるのである。國務大臣と靴屋に職業の貴賤なきや？これは無神論者には困難な問である。神を信ずる者には解り易い、即ち凡てに忠實であるか否かによつて貴賤は定まるのである。有神論の倫理が是に最も公平な解決を與へる。

神と共に歩むことが、道德の實行に力を與へる。イエスの置き給ふた聖餐、眼に見ゆるものを通じて、神は聖靈の惠と、恩寵とを與へ給ふ。キリスト敎倫理は世俗のそれに對して特異のものがある。神に對する德(信仰と、望と、愛)の中、信仰の敎へられてる所が新約中に二百四十ヶ所ある。望と愛とは、世俗の倫理にもあるが、稍趣を異にして居る。

信仰はアリストートルなどの唱へたヌースのやうな、人間最高の心の働である。望には名譽とか金とか、愛には嗜好や欲求に基くもので婦人其他種々あるが此處に說く神に對する德の對象は神と神の國とである。中世紀の學者は神に對する德を考へた時、たゞ神のみを考へる神秘論に陷り、自らの中にのみ見て、具象的に行くことを忘れた。而し今日は、神及天國を併せて稱へなければならない。對象に神を有することは形而上學者が研究の目標として神をもつてると同しに考ふる人があるけれども、それとは趣を異にして居る、サンタヤナの十四行詩『形而上學者の死に題す』といふ中に太陽をめがけて飛んだが、蠟の翼がとけてクリートの海に落ちて死んだと言ふことが書いてあるが、吾々の信仰が神と天國とを持つことは、目標として持つて居るので、此翼で天翔らんとするのではない。此立場は聖徒の特色である。クリスチャンの特色である。キリストを主と崇め、神及天國を目標にする。信仰と望と愛とを供へてるものでなければならぬ。若之なくば聖徒の資格はないものである。

信仰はキリスト敎の倫理以外にない言葉である。「義なる者のとる勝利の冠」とはギリシヤの思想を受けてるフアイローの思想である。しかしキリストの敎へ給ふ處は之と趣を大に異にして居る。即ち「義ならざる者の持つ義」である。則ち義人なし、一人もあることなし。正邪の立場からの判斷、又善の立場からは世に義人はないのである。其義人の無い所に一路の光明を見るには、義ならざるものが、義とせられねばならぬ。

其爲には悔改めがなければならぬ。又義となる爲には、悔改の次に再生がなければならぬ。一度死なねばならぬ。復活のキリストは第二のキリストである。義になる爲には吾等の中にあつて正しからぬものが全く死なねばならぬ。キリスト教を學問として研究して之を裝飾にしてる人があるが、それでは義の生活は出來ない。出埃及記四章廿四節にある記事には嚴かなものがある。其程度は死なければならないのだ。エホバはモーセを殺さんとするところがあるが、イスラエル民族の解放者として選まれたモーセの中に、「我」が死に切つて居なかつたのである。神の前に悔ひ、我の中にある「我」を捨て去らんとする戰がある。此戰は激しいものであるが若眞に是が我々の望であれば、神はよくこれを殺し、悔改めて信仰の生活に入らしめ給ふのである。

多くの人々の友として、種々の場所で福音を述べ得る者は、眞に「我」を殺して居るか否かを考へなければならぬ。生命を得んとする者は之を失ひ、生命を失ふ者は是を得るのである。己を殺す所に神の國が來るのである。（未完）（有文責記者）

扉を開けて出ようではないか

勝部武雄

聖書約翰默示錄三章二十節

いつかの白樺であつたと思ひます。千家元麿君の
詩に「出て來い、出て來い、皆んな、
學問や藝術や商賣や政治や宗教や

各の職業の中から
名譽や野心や利慾をすてゝ
戸を開けて、出て來て、
吸へよ、この清らかな
空間に滿ちる空氣を』

と言ふのがありましたが、私共は餘りに扉を閉めきつて居るのでないでせうか。蛇は夏になりますと、古い皮をぬぎ捨てゝ、すべ〳〵する樣な新しい光を背にみなぎらせて蘇生つた心持ちで匍ひ出します。蟬も心ゆくばかり歌ふ前には、先づ古い自分の衣をぬぎ捨てゝ、新しい羽衣に身も輕く、歌ひ出します。私は監獄の前を通る度に、あの重苦しい、閉め切つた扉がぢつと冷たい、もどかしい束縛の感じを與へます。中につながれた、赤い着物の遣瀨ない心地も充分察する事が出來ます。

然し、私共も一人〳〵をよく考へて見ますと、やつぱり、扉を閉めきつて、腐つた空氣に浸り込んでゐるのではなからふか。あの檻の中に、のたうち廻る、黑蛇の樣なものではなからうかと反省させられるのであります。

アダムとエバとが、お互に裸體である事を知つて無花果樹の葉を綴つて裳を作つてから、其の裳の中に、其裳を呪ひながらも、閉ぢ込められて行かねばならない不自然な運命に支配される樣になつて了ひました。神之を合せ給ふて一體となつたと言ふ夫婦の間にすら、或扉を閉ぢ合つてお互の心を、探り合はねばならぬもどかしい有樣となつて了ひました。堅い貝殼の中に閉ぢ込つてゐるのは、蛤や、帆立貝などばかりと思つて居ましたのに、やはり私共人間も堅い扉をお互に閉め合つて參りました。之は私共には實に悲しい事だと思ふ、戀人同志でありながら親子でありながら、兄弟、親友でありながら、お互に扉の後に隱れて扉を楯にとつて、探り合ひ、戰ひ合はねばならぬとは、何と言ふ淺間敷い人間の墮落でありませうか。歷史とか、社會とか言ふ人類の出來事、活動の表に、どれ丈私達は純眞な、赤裸々の

人間其儘を寫し出してゐるだらふか。秩序とか、禮儀とか言ふ美名の下に、自らの天性を束縛してまで、自らの眞實を擁護する必要が何處にあらう。私共は文明とか、文化とか、進歩とか、秩序とか言ふ語に眩惑されてはならぬ。若し其れが形式的の型にはめられて、扉を閉めて純眞さを失ふ事であるならば、何處までも是を取り返さねばならない、人間性の誇りの爲にも。沖野さんは言ふ「人里離れた山奥に育つた、自然兒が、突然文明と稱する都會の地に持つて行かれたとしたなら、彼は其因襲と虚禮の扉に窒息されて了ふであらう」と。私共の先祖アダムエバを今日の東京の銀座に連れて來たとしたならばどうだらふう。自分達が神の前に立てた、たつた一枚の扉が、斯うまで複雑な扉を生んだ事を喜ぶだらうか悲しむだらうか。私共が今日爲しつゝある不正直な天眞を失つた行爲は、數千年、數萬年の後には、恐ろしい多くの罪惡の扉を製造して居ることを忘れてはなりません。

十八世紀の末にフランス貴族文明の爛熟期に際してルッソウが「自然に還れ」と呼びだのは、即此假面的形式的文明に對する豫言的警告でありました。平安朝の腐爛文明と宗教とに對して、罪業深い凡夫を目的とする平易な信仰の福音が勃興したのも、やはり形式生活に對する人情の叫び聲ではなかつたでせうか、私共の歴史は何の頁もどの頁も、人間其の者の歴史でなく、人間の扉の歴史で、人間の假裝、人間の附屬物の歴史ではありませんでしたらうか。

私共は餘りに狹つ苦しい扉の中に、自己をたて込め過ぎてきた、あまりに自己の純眞性を失つて、共同生活を生きて來た樣に思はれます。殊に十九世紀に芽を出した物質文明は、ダーウインの生存競爭の主義に援助を得て、益々殘虐となり、益々自己擁護の扉を閉めて了つた。生存は競爭である、競爭は進歩の原動力だと多くの學者達は解釋いたしました。然し之は人情を刺激する力を一面のみから見て、競爭と共勵とを踏み違へた考であります。競爭は扉を

益々堅くして自己を守る事であり、共勵は自己の扉を開いて愛し助け合ふ事であります。今日の人間は複雜になつたと言ふ。然し複雜になつた事は進歩でもなく、誇るべき事でもない、純眞な愛すらも素直に發露出來ない複雜は、唯多く閉め切つた呪ふべき扉の所有者と言ふに過ぎません。私共は歷史と言ふ名の下にあまりに多くの扉を遺傳されて來た、因襲とか傳統とか言ふ扉からもう出て來て、純眞な神から與へられた愛に浸つても好い時でなからうか。嬉しい事には今日の人達は生みの苦しみを爲ながらもうそろ〳〵眼覺めかけて來た樣です。私共の祖先の飾つて呉れた人類の歷史は、眞實に滑稽な假裝行列に過ぎなかつた事を漸く知り始めた樣です。そして此行詰つた僞りの文明から、新しい空氣を吸ひに皆な出て來い、出て來いとある偉大なものが、十字架の上から叫んでゐる樣です。

　然し眞實のエデンの園に眼覺める迄には、まだ〳〵人間は試錬を經なければなりますまい。もつと恐ろしい犧牲が拂はれねばなりますまい。今回の歐洲大戰で扉を閉めきつた文明の假面ははがれかけた階級爭鬪で型の中に納りかえつて居た、貴族階級の一角がくづれて參ります。然し之が爲めに幾多の犧牲者が出なければなりますまい。毎日の新聞は山程形式的、型にはまつた貝殼の爲めに、押しつぶされる犧牲者を報じております、其最も近い例を申しますと、先頃家名と言ふ扉に醫學博士の家庭と言ふ扉に閉ぢ込つて最も大切な娘の生命をさへ犧牲にした冷酷な親のあつた事を記憶してお出でゞせう。悲慘な犧牲者となつた娘の親にとつては血を分けた娘よりも自分の門地、社會上の地位と言ふ一枚の扉が、そんなに大切であつたらうか。ある華族の娘が先年此窒息し相な扉から拔け出ようとして、其扉に壓迫されながら、出は出たものゝ、いづこも同じ扉の閉め合ひに遂に犧牲者とされた事をよく御存じでせう。私は此娘がやつた事が正しいとは言はない、然し重い扉の中に育つた可哀想な犧牲者だと言ふ、

事は充分言ひ得ると思ひます。またある所でもつと狭つくるしい扉を閉めてる實例を見せつけられました。親が娘の結婚問題に際し「私の家は士族だから士族の家へでなくては娘はやらないと言ふのであります。私は之を聞いた時、士族などゝ言ふ階級は私の頭からもうとつくに抜け出た、腐れ扉だと思つて居たのにまだ此腐れ扉を御生大事と守つて、娘を殺す恐ろしい親のある事を知つた程でした。中略

「愛は僞らず、嫉まず、誇らず、己の利を求めず、人の益を圖るなり」とパウロは申しました。其純眞なるべき愛に於てすら人は互の間に扉を置いて掛け引をいたします。

姉崎さんが嘗て斯んな事は言はれた「同じ人でありながら、其人が貴族である場合に、其お屋敷で拜顔の榮を得る時と同じ船で太平洋を渡る場合とは殆んど別人の感がある」と男爵とか、子爵とか、伯爵とか、御前とか言ふ特別の扉に生息する場合には人間性が自然に發露しないのでありませう。中略

エデンの園では、貴族も、平民も、貧民も富者も、博士も、學生も、男も女も、國家も社會も各々の扉を開けて狭つ苦しい中から出て、此自由な天地で手に手を取つて笛を吹いて踊るこれは基督教の一つの理想であります。

最後にもつと恐ろしい、扉は自己をあざむく扉であります。自分をもつと高い評價を以て斷定せんとする扉であります。私共が瞬間〳〵に起り來り起り去るあらゆる考へや私共が意志を以て永續すべき自己の思想やそうしたものに對する自己否定の扉であります。例へて見れば「キリストが女を見て色情を起す者は心の中既に姦淫を犯せる也」と申された。私共が日常に起り得るあらゆる、汚い感情や意志に對して、私共は常に自分の辯解の扉を立てゝ安心する事であります。「自分は人間的な弱い者だ、あらゆる他の人だつてそうだらう」と然し之は神の前に許さるべき辯解とはならない。あらゆる他の人間が然であるから許さるべき事だと思つてはいけない。「己

れの如く他人を愛せよ」との基督の言葉は單に利己的に己を愛する如く、との意味ではない、もつと深い處に意味があるやうに思ふ。愛は僞らない、自己を僞る所に愛は起り得べきものでない自己を僞ることは自己を愛することではない。多くの人が、「自分で自分が分らない」と申します若し自分の中に扉がないならば自分位透明に分り得るものはないと思ふ。自分で自分の心に扉を置く位不自然な事はない。私共は自分で自分を縛り上げて行く事をしてはいけない。他人を僞り、憎み、傷ける事は先づ自分を僞り、憎み、傷け、呪ふ事に外ならない。餘りに人間的な、みにくい此扉から先づ私共は出て行こう。そして自分を透明な自由な、嚴肅な神の靈の中に解放してやりませう。のび〳〵と自然に育つ樣に、

私共は凡ての扉を解放して出たい、腐つた空氣から新しい空氣を吸ひに出たい。それが眞に幸福である事も知つてゐる。知つて居ながら扉を開き得ないもどかしさ、力なさを知つてゐる。そして自分で自分をすら持て餘してゐる事も知つてゐる。そんな扉を開いて出てゆく事は理想であつて不可能であるかと言ふに決してそうではないと思ふ。なる程扉を開けるに困難な努力も入りませう。然し何よりも嬉しい事は始めに讀みました聖句であります。

「視よ我戸の外に立て叩く、人若し我聲を聞きて戸を開かば、我その內に入りて彼と共に食し、彼もまた我と共に食せん」とキリストは申されました。

自分で持てあました自分の重い扉も、現代社會の重い扉も、深い神の力を持つてこそ容易に開かるべきものだと思ひます。信仰の力とは此扉を開く力に外ありません。私共はもつと潔い、もつと美しい、もつと自由な、神との食物を共にせん爲めに、お互に扉を開いて出やうではありませんか。

東京女子青年會の會館增築の爲めには非常な努力をしておられると聞きます。然し其建築も先づあなた方が凡ての扉を神と人との前に開いて、ぴつたりと愛と愛とに抱き合つた魂の大建築が形に現れたものでなくてはならないと存じます。私どもの內の扉を開き出來上つた扉を社會に開き、內も外も明になつて神と共にあることを明に示す時に增築の意義があることゝなります。皆さんと共に窒息しさうな中から扉を開けて出ようではありませんか。

（一九二一、一〇、一六）

NEW KINGS AND QUEENS

A French nobleman was riding along one day in his fine gilded carriage, drawn by swift and beautiful horses, when a little child ran across in front of them, and was killed under the feet of the horses. The carriage stopped and the noble man looked out, very much annoyed at the wait, and when he saw [it was a child that they had killed, he only laughed scornfully and said that the world was far better for the loss of another brat like that, and ordered his men to drive on! This was in the time of the French Revolution, and it was things like that which made the people rebel. Not very long ago in Belgium, a beautiful automobile came down a country road, carrying the king to a country home, when again a little fair-haired girl ran out, before the man could stop the car, and she, like the first child, was killed. The king got out of the automobile, picked up the little body tenderly in his own arms, and carried it to the mother, to whom he expressed his deep sorrow that it had been his automobile that had taken the little girl's life. This was the *King*.

In the book of Esther in the Bible, you may read a story of the young queen Esther, who went in to the king whom she feared, in order to beg him to save the people who were to be killed by his order. A young girl, afraid of this terrible king who was her husband, but very sure that she wanted to do all in her power to help others, put aside any pride in being queen, and went in to ask for his kindness to the Jews. Queen Esther! Those two words today stand for a bravery in a sweet and humble woman, that many, many women have longed to have in their own lives. Others first, and then their own lives afterwards.

It is hard, I think, for you and me to be humble, in the finest sense. We are all Christians, perhaps, who read this article, but we are all failing to be the most humble and yet most brave persons that the Christ-life calls for. In what is it that we think we are a little better than that girl over there? Or do we envy that other girl, whose mind seems so much better than ours, or who seems to be liked by everyone, while we are often ever so lonely? What, after all, do we want? Is it that we think of happiness only as coming when we are liked, or when we have had a success in our class work, or when somebody has paid us a compliment? A pretty flimsy kind of happiness is that which is built on what people think of us, and yet we do, many of us, let that be the judgment of whether we have had a happy day or not. Not until we have changed what we think happiness is, do we the time when we can areiue arriue at the end of an "unhappy day", and lift up our hearts to God in a prayer that has happiness and peace in it, because our idea of happiness is large, and includes the question "How much have I succeeded in living as God expects me to live, how much have I done for Him today?" Then we have become more nearly royal and queenly, for we look at our lives in the light of how much they are *serving*, not how much

of exterior homage and attention is being paid to us.

Yet there is a very disagreeable kind of humility that we all dislike very much. It is in the kind of person who has no self-respect, and who makes no attempt to try things, because she thinks that she is not able to do them. That is not a true humility, but is fear. Do you think Queen Esther would ever have freed her people if she had been afraid of herself, if she had been conscious and timid as she went in before the king! I rather think that beautiful young girl had to pause a minute before she opened the door to that room, and just ask God to make her able to speak. Can't we do that too? Can't we, even in the little times when we are afraid to speak in class, when we are afraid to speak to that girl we are pretty sure would like to have us speak, just lift up our hearts, too, for the little courage we need to go ahead? Oh, sometimes when I see a class of girls who get embarrassed when they talk, or who will not play a game that makes them be in the center of the room, I think to myself,—"Oh, why don't they forget themselves!" No, humility is not fear, it is love. It is such a broad and sure and brave thing, that it counts all the things that pertain to self useless if they do not serve others. We are *queens* only when we are brave and humble.

I think Abraham Lincoln was like that. He was a man from the country, he never did wear fine clothes, he knew he did not have as much education as many of the men who criticized him, he probably was often embarrassed in a roomful of persons who were more cultured than he was, and yet his humility was a brave kind, so that while he asked nothing for himself, he stood firm in his desires for the people of his country. He was their servant, and he was going to help them no matter what it cost him. That is why Abraham Lincoln ranks now in the hearts of the world as a *king*, greater than the kind that wears a crown, and one whose life was given in humble service to his people.

How shall we learn this humility? Not all at once, by saying, "I want it", but day by day, hour by hour, testing our lives by the greatest Life we know, that of Jesus Christ. If we do walk constantly with Him, if we do seek to really understand the secret of His power in the world, then we will have the ammunition for our fight to be great, in the very finest sense of the word. That is learning how to be a Christian. And we do not get it by simply the baptism of water, which the minister lays upon our heads, we get it by testing our times of unhappiness by asking ourselves what we mean by happiness, by a real baptism of sacrificial service for others. If Christ lives *in us*, as paul said He did in him, then we will find it easier and easier to be humble, for we shall not be living our own lives, but His. And when the curtain of the night drops about us, and we turn to rest after our day's work, or our day's pleasure, whichever it is, we will feel a deep sense of happiness, not because we have been brilliant, or clever, or laughed a great deal, but because through and in it all, we have walked with One who was always brave and yet humble, who was very much beloved, and yet who was despised and rejected of men. What do you think Jesus' test of a happy day was? Do you know the secret of His *Kingship*?

「新約」を讀みし後に

村峰榮子

熟れ過ぎてどす黒く變色しかゝつた無花果に手を觸れやうものなら、ピッと彈かれる樣にして甘い誘惑の液汁が流れ出るぢやありませんか。私は創作、「新約」を讀んだ時にさうとでも譬へ度い感じを受けたのです。なるほど「新約」は巨像の樣に力作であるに相違ない、僅かに數行しか福音記事に表れて居ない數多くの人物を、あれ程迄に生かして描き出した技倆には全く敬服せざるを得ないのであります。にも係らず、私は作者に不平が申度い、作者はあれをユダを主にして書いたのか、或はイエスを主としたのであるか、若前者の方により多く作者の主眼が留められてゐるといふならば、イエスは單にユダを生ますべく用られたからくり人形であるからいゝとしてももしも、後者をエンフアサイズするといふならば、私は「新約」に出て來るイエスのために辯護し度いのです。さういふ動機から私はこの稿を書く事を思ひ立つたので、もとより藝術に對しては全くの門外漢の事ですから、決して是は批評ではありません日頃自分が信仰の眼を通して描いてゐた所謂宗教世界の立場からの、無遠慮な實感だといふ事をおことはりしておきます。ですから定評ある作者に對してこの事が決して無禮でない事を信じるのであります。

「新約」はたしかに目新しい終り迄あきる事を知らない非常に面白いものでした。云はゞ人間のイエス傳といふたつた一つの單純な題材を飽きずに面白く讀ませる、その一事丈けでも既に成功と言はねばな

りません、その代り、讀者をして飽かせまいとする部分的主題の配列方にはかなり不自然な處がある樣に思はれました。それが爲めに、目先がちよいちよい變り過ぎて、今一息といふつき詰めた Crisis な緊張味が足りない物足らなさを覺えたのであります。

イエスは立派に大ッ平な私生兒に描き出されて居ます。從つて母マリアはお人よしのヨセフの目の玉の黑い中から二三面白からざる風評の立つ女しかも鋭感なイエスにそれを氣取られては居らぬかとはらはらして居る、母としての尊敬を我子から受くるに足らぬ母に作られて居ます。よし頭ごなしに處女懷胎を信じて居ないにしろ、私の胸に生きて來たマリアはそんなに迄耻も愼しみも釋く女ではないのですカトリックの尼さん達が跪いてお祈を捧げるあの幽遠な聖母、女性の淚の泉を湛へて凡ての事を深く思ひめぐらす慈悲の母、悲しみの母、篤信の母、彼女をおもへば騷立つ胸すらなですかさるゝ樣に和らいで來るあこがれの聖母、その懷しい我マリアをつまらない大工の妻として、無殘に冷酷にけなされて了つた事に依て幻滅のはかなさ位の度をはるかに越えた一種の憤ろしさと心の痛み苦しみとを私は印せられました。なぜ作者は、イエスに深い同情と理解とを持つた愛の母マリアを描いて下さらなかつたのでせう。

イエスは十二才で初上洛をした時に同伴の者達からはぐれて、神殿の中で年老達を對手に議論をしました。マリアが狂氣の樣になつてたづねて來たのに向つて彼はかう答へて居ます。

「俺は俺の神樣の家に居るんだよ」

彼はさう答へてからはつとして、天の父といふのは本當に彼の父で、神殿は彼の家なのだらうといふ氣にふら〳〵となつた、と書かれて居ます。それから彼が一人前の若者になつてから、妹ヨアキムに神に祈る樣にすゝめた時に、彼女が神樣は遠くに居り過ぎて祈りの聲が屆かないやうだ。と答へたので、

彼は考へさせられて居ます。

「人間と神様の仲に立つて人間と神様を結びつける仲立があり相なもんだ」と。

かうして少しづゝ「神子」としての自覺の生じかゝつた彼イエスは、ヨルダンの河畔に立つ聖人ヨハネから受洗しました。彼は水から上る刹那に「汝は我愛子なり」とどこからともなく聞えて來るのを感じたといふのです。その聲が次第に心の中で大きな聲となり、體の中に充ち溢れるやうな力となつて來たといふのです。彼は曠野に於ける心の爭鬪を終えていよ〳〵一本立に神子となり切つたといふのです。彼がヨハネよりも勝れたる者との自信を持つて居た事をはつきり知るのにいゝ插話がありました。それは少年イエスとヨハネとが始めて會見した折、ヨハネが自分はイザヤを探しに山奥へ行くんだと言つたのに敗けずに、俺はイザヤよりもつと偉いエリヤになるんだ、エリヤは火の車に乘つて天に上つたのだとイエスが言ひ返して居る事です。私はイエスが一人立ちになる、此處迄の徑路が極めて自然であり、鮮明であつて、自分の胸にぴつたり迫るものがあるのを覺えたのです。けれども神子として立つた後の彼イエスの感情なり行動なりが、今迄一つの何か超自然の勢力の感化の下に、超人的靈感を體得して來たイエスのものとして、そぐはない節々が餘りに誇張されて居るのを不服に思つたのです。作者はキリストの自覺を不安定な、行き當りばつたりの式に取り扱ひ過ぎては居ないでせうか。彼は神の國がどういふ形式で現れて來るのだか、そこに確心を持つて居ないのです。

「――神の國はけふあすと目に見えて現はれるものでなく、一人〳〵の心が今迄とは違つてお互ひに愛し合ふ樣な心になり、一人〳〵の心の中に神の國が宿り、それが世界中の人の心に廣がつて、始めて神の國の世の中となるのですか」

イエスはかう言つたユダの言葉を聞かされて、胸に何かをどしんと打ちつけられたやうに感じて、そ

れを言つたユダを「何といふ男だらう」と驚ひて居るのです。それからイエスはマグダラのマリアが言つた次の言葉にも深い注目を拂つて居ます。

「……たとひイスラエルが獨立國になつても、人心が變らねばやつぱり貧者は貧者で、病人は病み罪ある者は地獄へ行かねばなりません。私はすばらしい事をメシヤがなさると思はれるのです、人の心が一遍で變る樣なすばらしいこと。」

イエスは亦カペナウムで說敎をしました。

「──私は天から降つたパンだ。このパンを食ふ者は永遠に生きる。私が汝等に與へるパンは私の肉であり、世の命のためにそれを與へる──」

偶然に自分の口から出したそれらの事は何を意味するのだらう、マリアの言つた「何かすばらしい事」とは何だらう、そしてこの中にその「なにかすばらしい事」が含まれて居はしないかと考へて居るのです。そんな風にイエスは、當座にごしの思ひ附をぼかつと喋舌つて了つておいては、あとからそれに理屈をつけたりその意味を考へたりする、緩慢な淺薄な信念しか持たなかつたと信じられませうか。父なる神の啓示を、ふとしたマリアやユダの言葉から求めねばならなかつた程、イエスには權威がなかつたでせうか。「一粒の麥が地に落ちて死なねば多くの實を結ばない」、キリストが死を自覺してからこの言葉を言つたのではなくて、先に彼がたとへに語つたこの言葉のうらから己が死を啓示された樣に描かれて居るのも大なる不滿であります。作者はまたキリストを肺結核患者にしてあります。屢々彼は高熱にうかされ、血を咯き昏倒しては、その度に新しい啓示に觸れるといふのです。然し病的に感愛した神意が健全であると言ひ得る物でせうか。健康者の健全な信念にこそ我々は信頼しますけれども。熱病人の樣にふら〳〵して動いて居る蒼白なキリストを描かうよりは、身體の頑丈な健康な彼が、四千五千の聽衆を對手に廣い野原で宣敎する容姿の方がずつと私は慕しいのです、

空の雀や百合の花を歌つた野の詩人イエスにはやさしい濃かな情緒がたぎつた筈です。だから彼には戀愛が必ずあつたり相違ないのです。「新約」ではそれがマグダラのマリアだとされて居ます。マリアは隨分みだらな思をイエスに寄て居るのです。彼も時々その強烈な誘惑を感じては、時ならぬ時に「神子」の自覺さへ曇らされるのです。然し戀が、事業か、彼が愛を捨てゝ事業へ驀進したまでには相當に苦い深い人間としての苦悶があつたのではありますまいか。作者のイエスは淨化した愛でマリアを愛してゐるのではなく、矢張り嫉妬心も交つた普通の男が女を愛する思で愛してゐる樣です。けれどもマリアが思ひ迫つて接近し樣とすると、彼は巧みに一段高い階段に上つて居るのです。かうして彼は無解決のまゝ十字架に上つて了つたのです。私は此の場面に青年イエスのつき詰めたなやみを表現して貰つたならばと冀ふ者であります。

十二使徒の中でなぜか一番にねぢけ者のユダが頭がいゝ樣です　時にはイエスが行き迷つて居る道を先廻りして見拔くほどに、それで何がなしに彼が煙たい處へ、マリアが殊更彼と親密だといふので、イエスはやきもきして居るのです。彼はユダを暖く抱き込まうとしてどこかにつきあたる障害があつて、ユダを愛し得ない、のみならず憎くてさへ堪らぬといふのです。或る時イエスが一つの大岩にユダとマリアと並んで腰をかけて居るのを見ると、忽然として妬みの心に身體をふるはし、ユダを憎む念が全身に充ちて來て、

「マリア、惡魔のそばに居るな」

と叱咤つたといふ事、それから純な美しい感情からユダが白百合の花を、マリアの手を經てイエスにそれとはなしに獻じた時、彼は喜んで其花に餘念もなく恍惚として接吻までしたといふのに、それがユダから獻げられたのだといふことを聞かされるや、前後の見境もなくいま〳〵しさうに花を岩角にぶつ

つけて捨てたといふ事、そしてあとから「そんなことするんぢやなかつた。然しまう取り返しがつかぬ」と輕く安直に諦めをつけてしまつて「どうしてユダを暖かく心に容れる事が出來ないのだらう」と簡單な不審を心の中に起す丈で濟ませて居る事、ベタニア村からエルサレムへの途上で無花果が食べたくなつたのに生憎葉ばかりが青々と繁つて居たので彼が「失望の次に癇癪が起つて。「えつ、枯れつちまへ」と樹に向つて罵つた」といふこと、いくら彼が人間であつたからといつても私には到底、こんな苛々した憎しみのイエスが見えて來ないのです。

作者のユダは本當に可哀想な「虐げられた人」です。無智な一人よかりの使徒達の中に交つて一番にイエスの心持に接近した心を抱き乍ら。いつも爪彈きの異邦人扱ひを受けて居るのです、殊にペテロの樣な熱情家は總明なユダを賣國奴の如く罵り續けてユダを暗いやるせない穴の中につき落してゐるのです。彼がいづれにも容れられざる淋しい悲痛の胸を擧げて、「敵を愛せ」と言はれたイエスに愛と慰籍とを求め樣とする時、イエスの努力する愛が思はざる痛みの鞭となつてその胸を突き刺す、「主はなぜ俺を惡魔の國の者だの亡ぶる者だのとばかりいふのか。人の心に神の愛を宿さしめやうとする主がなぜ俺につれないんだらう。」かくしてユダはどつちにも逃れる道を塞がれて、憤滿と怨恨に燃えつゝ惡魔の道に導かるゝ他に仕方がなかつたのです。

最後の晩餐をとりつゝイエスは自分を裏切つた者が誰であるか、探りを入れるつもりでユダにあてつけて言つた。

「私を裏切つた者が一人居る。その者は速かになすべき事をしたらいゝだらう。」

うす〳〵感づきながらもわざとユダに對してそしらぬ樣を粧つて居る同席者等の冷たい、不自然な鎭靜の壓迫に居たゝまれず遂に彼は飛び出して反逆者となり了うせてしまつたのです。最後まで彼はイエスに愛を求めて居ます。「主が一言でも俺に優しい言葉と溫かい心の一片を與へてくれたなら、俺は救はれるのだに――」と。「ユダをほんとうに愛さなかつたからユダが自分に叛いたのだ」とイエスも考へて居ます。さうしてユダは更にその明晰な頭腦によつて、イエスを捕吏に導く事が結局は神の事業をたす

ける事なのだと判斷して居ます。なぜユダが主を賣つたのか、それを正しく了解する者は一人もありますまい。私達の智慧は「水鳥の來る日」の著者の言を借りれば「なぜ神がこれ程迄に人間を苦しめなければならぬかを理解することは能はない」のですから、私は作者がかくまで巧みにユダ叛逆の心理を描寫した事に對して驚嘆する者であります。たゞそれがあまりに作意の過ぎたイエスを出して、ユダを仕立て上げ過ぎた恨みがありはしますまいか。イエスはどこまでもイエスです。人間として最上の人間である筈です。イエスの弱點が(假りにあつたとして)それに依て自らも躓き人にも罪の誘因となつたが如くに描出された事は、イエスが人間の弱點を體驗しそれに打ち捷つべき强味を示したと信ずる私の信念にとつて、大きな侮辱だと叫び度いのです。イエスがユダを愛する事が出來なかつたといふなら、十字架上の出來事はみな嘘の作り事だと言はねばならなくなりませう。ユダが叛逆するまでの道順として、イエスの個性がユダにとつて餘りに都合のいゝものに出來すぎてゐるのも淋しい事實です。私は「新約」を下において「いゝえ、さうぢやない、主はユダを愛した、その持てる、隱れたるダイヤモンドを引き出さうとして、他の使徒にまさる多くの鞭撻を與へてお愛しなされたのだ」こう叫ばざるを得なかつたのであります。

さきに私は「無花果の汁の樣な」といふ言葉を用ひました。それは全篇に漲つた性描寫の露骨なあくどさから受けた感じなのであります。それは息づまるやうなむき出しの性文學だからであります。

純文藝の立脚地から眞劍に描いたイエスを宗敎の實感を以て云々するのは、丁度畫家に向つて、「あなたの此の手から乳は出ませんね」とか「この山からは金がとれますまいね。」とかいつて酷評すると同じ非常識さであることに氣がつきます、が年長く我胸に宿り住んだ美はしいイエスの幻が、むごたらしくも叩きつけられて破壞さるゝを惜しみ、それを單に物語中の人物として看過し去る事の出來ぬ何物かに迫られて思はず長くなりました。私は些でも主を任ずる者は、作者の意志を尊重しつゝ、然し之に呑込まれないで讀む必要がある事を思ふのであります。

勞農露西亞と婦人

住谷悅治

最近の出來事の中で最も私達の興味を引くものは一九一七年十一月露西亞の無產者が政權を握つたと云ふこと――即ち露西亞革命――であります。露西亞に就て未だ明確なる報知が得られぬため種々の臆說が傳へられて居ります。そしてボルシエビズムと云ふことが非常に恐怖の的となつて非難されて居ります。乍併一九一八年七月十日第五回全露ソヴイエット大會の決議によりて通過した「露西亞ソビエット聯邦社會主義共和國基本法」を讀むと世に所謂過激主義と云はれてゐるのが決して亂暴な狼籍のものではなく其れと反對に頗る進步した理想的のものであることが首肯されるのであります。

一九一八年一月卅日に制定せられたロシヤ婚姻法の如きは從來流布せられたあの驚くべき「婦人國有」と云ふ虛說に對して決定的な反證を與へたのであります、そして婦人の權利が廣く認められ地位が著るしく上進したことを知るのであります。

露西亞親族法典は一九一八年九月十六日に發布せられたのでこれは二百四十六箇條より成立し「全部」を一貫した思想は共產主義と個人的自由の確立とに努めてゐると云ふことであります。而してソヴイエット露西亞親族法婚姻法に於て私達が注意すべき著しい點は

一、男女同權の基礎の上に立つてゐること

二、當事者同志の意思のみを結婚及離婚の條件とせること

三、私生兒の制度を全廢したること

四、父母の親權兩等なること

等であります。夫故「婦人國有」どころか男女關係は純然たる個人間の私事であつて國家乃至社會の干渉すべき問題でないと云ふことが信ぜられて居り婚姻法を制定して自由意思に依る一夫一婦婚を確立することでさへも國家の越權であるとして一部人士の激烈な反對を買つたと云ふことであります。

夫婦關係の沿革に就いて穗積博士は『婚姻ノ歷史ハ妻ノ地位ノ上進史ナリ』と言つて居りますが婚姻の歷史が妻の地位の上進史である樣に、親子關係の歷史が子の地位の上進史であり、勞働運動の歷史が勞働者の地位の上進史であり、婦人運動の歷史が婦人の地位の上進史であると云つて大過なきものであります。以前から所謂女權擴張運動と云ふことが生じて居りまして、法律上に於ては婦人の自然能力と法律能力とを一致せしめようと云ふことを期して現行法制が夫婦間に設けられた種々の差等を批難し攻擊しつゝあるのであります。

露西亞に於て婦人の激烈な運動が或は諸外國と少しく其趣を異にするかも知れませんが事實に於て婦人が婦人のために、更らに人類解放のために眞劍に活動したことは疑を入れる餘地がありません。

一九一七年三月九日は露國革命記念日となつて居ります。この日は社會黨に依て定められた『婦人デー』でありましたが此日ペトログラードの婦人勞働者は生活費の暴騰に對する一大示威運動を開始しパンを要求し果てはあの○○○勃發の機會を與へたのであります。翌年四月にはモスコウ市及び隣接地方の婦人大會が開催せられ食糧問題、生活費兒童保護の問題を論議し重要なる決議を通過しました。十一月にはペトログラード及北露コムミユンの十萬の勞働婦人を代表する婦人大會が開かれ五百の代議員が會合して母性保護失業保護等に關する重大なる決議をしたのであります。

一九一七年十一月革命後アレキサンドラ、コロン

タイ女史は社會人民委員となつてボリシエヴイキの最高執行委員會に列し、ジノヴイエフ夫人レニナハはジノヴイエフの主宰する北露コムミユンの社會委員となり敎育人民委員ルナヂヤルスキーの夫人は勞働者の子供等の爲めに家庭と學校と運動場とを兼ねてゐる兒童殖民地に關する事務の主任となつたのであります。この外全國を通じて幾萬と云ふ多數の婦人が敎育及び社會事業に盡瘁して居るのであります。

ボルシエヴイキが總動員を行ふたとき、婦人は非戰鬪員として從軍したのであります。彼等は戰場や野戰病院に衞生隊附として送られ、又は内地で看護婦として活動しました。未だ戰火の罷まぬ砲火の中に突入して彼方此方と戰場を往來し砲彈に傷いた血塗の兵士を連れ返ると云ふ樣な驚くべき勇氣を持つて活動しました。婦人兵士は更らに兵站部、輸送部郵便局等の後方勤務に從事してプロレタリアトの共和國支持のためにはあらゆる犧牲と努力とを惜まないのであります。

特に内部に於ける啓蒙及至宣傳事業は殆んど婦人が獨占して動いてゐるかの觀があります。圖書館や讀書室があり社會主義の理解を深くするために隊内で頻繁に集會や討論や講演會が行はれる。中略

例へばクロポトキンの自叙傳の中にも斯樣な事があります。役人が村中の戶口調査表を提出するように命々する。其の中から十八歲以上の青年十六歲以上の少女の姓名を選び出す。「これはロシヤの法律上の婚姻年齡です。役人は「ジヨンはアンナに、ポオルはハラアシカに嫁すべし」と云ふ樣に五組の新夫婦の名を書き上げる。而してこの五組の婚禮は十日以内即ち翌週日曜迄に行はれなければならぬと書き足します。村中には絕望の悲鳴が上りました。若きも老いたるも泣かぬ者はありません。何故と云つてアンナは戀してゐる。グレゴリに嫁入りする積りであり、ポオルの兩親はもうフエドトフの家と話を決めてあつたのでした。定めの日になると婚禮と云ふ

より寧ろ葬式と云ふ方がふさわしいやうな行列が幾組も教會へ行きます。若き女達は葬式の時の様に泣き叫びます。式が終つたらすぐ報告する様にと家の男が一人教會に差向けられてゐる。やがて其男が帽子を手にして青くなつて當惑して歸つて來て「バラアシカがどうも强情でボホルと添ふことを承知致しません。御神父様が「異存はあるまいな」と申しましても「いゝえ私はいやでございます」ときつぱり申すのでございます」と報告しました。司祭とバラアシカの一族のものは可愛い娘を取り捲く。母親は泣きながら娘の前に跪いて「一家を破滅に落してくれるな」と頼む。娘は猶も暫くは「私いやでございます」と言ひつゞけるけれど果てはだん／＼聲も細つて花嫁の帽子が涙に濕ふた娘の頭に載せられ、人々は「芽出度納まりました」と安心する小さな鈴を鳴り響かせつゝ列びゆく五組の婚禮の行列は泣き叫ぶ娘達の聲と涙に咽び入る親達の姿とを交へて式の行列の如く續いてゆく。

ニコラス二世治下全體を通じて斯うした暴虐な壓制が行はれました。中略、政府が威嚇政治を思ふ存分實行してる限りは平和な手段では何事も出來ぬと言ふことを確信するに至りまして平和な運動者も次第にテロリスト變つて來たのであります。男も女も牢獄に投入せられ流刑に或は死刑に處せらるゝのを覺悟して良心の命ずる所に從つて眞劍に活動しました

ニコラス二世治下の壓制政治の陰に斯うした多數の尊い犧牲者を出しそれは軈て眞面目なる社會改造に志す男女を輩出せしめ、相提携せしめたのであります。斯て前述の一九一七年の婦人の大活動を見るに至りました。一九一九年北露コムシユンの勞働婦人大會の席上に於てシノヴイエフ勞働婦人の援助が無かつたならば吾等の革命は決して成就しなかつたのであらう。男子は若し勞働婦人が或る時期に吾等と戰を共にしなかつたならば吾等は革命を距る猶遠かつた事であらう」と述べたのは如何にも尤なことであります。而して露西亞の婦人が著しく權利を認

められ解放せられ上進したことは宜なりと思ふのであります。

一體婦人問題の解決は社會問題の解決と符合して居ります故婦人問題の根本的解決は全人類の利益のため、社會問題の解決を標榜する人々と相提携せねばならぬと思ひます。而して社會の根本的改革の爲戰ひ兩性をして完全なる經濟的且つ精神的獨立を樂しませる社會制度を打ち建つべく利益を共通せる皆級の男子と協力するのは勞働婦人の義務であると思ひます。何故ならば兩性の社會的獨立と平等とが存在せない限り人類の解放は不可能に終るからであります。（一九二一、一〇、一五）

光明藏

別所梅之助

かたらふまにも、あだし心をいだくなる此のならはしをいつよりか得し

人は我にそむかぬものとあなどりて、人にそむくを我あやしまず

心頭に發する怒、我とおさへ、たゞおだやかに、かへりごと書く

ひろからぬ我が心かな、敗れじのおもひの、今も夢に通ひて

我が墓にしるしの石もおかざれと、思ふ心を君解かずして

骸かくす穴を掘るのみ、わが上に土饅頭をもおかじとぞおもふ

金字塔築きしパロに我を比して、君は何をか笑はんとする

世のつとめに得堪へぬまゝに、書の中にかくれもゆくか、卑怯者、我

跛者が盲者をわらふあざけりに、我が世果てんものさびしくて

生きんとて人を傷づけ、生きんとて我を蔑すも堪へがたければ

傷つけつ、きずつけらるる我と世とを超えて、抱きて、神を見るかな

人の世のすがたの中に、み神をば見んとおもへり、なやみてのち

兜なす大山もよし、さゝなみの馬入もすゞし、平塚のさと

紺青の海見えそめぬ、いつの日も、我をまどはす海見えそめぬ

高きものの根張見よやと側火山あまたしたがへ、不二そそりたつ

いくたびか淵におち入る危ふさをのがれて立てり、されど今また

傷つけてそれと覺らず、傷うけていつか癒えゆく樂天家をば

ここにして我突かれなば落ちなんと思ふこと多し、白日の夢

分裂のなやみの中に久にをれど、なほ大空のあふがるるかな

少しさびし、生面の人みづからの利ゆゑに我を訪ふとさとる日

いささかの利を得ん爲に我を訪ふ人をも今は疎まじとする

はやてのごと病魔來りて過ぎていにし一週の後の天地のいろ

みづからをめづる餘りに死を避けず、なやみをさけず、傷つきて立つ

聖書研究

馬太傳によれるキリスト傳概略

武本喜代藏

馬太傳を三區分すれば

一、一章一――四章十六イエスの人となり

二、四章十七――十六章二十イエスの宣傳。

三、十六章廿一――廿八章終迄イエスの苦難

イエスの誕生及受洗

一、處女降誕。マリヤは聖靈によつてイエスを生んだのに何故ヨセフの血統が掲げてあるか。これはヨセフトマリヤは從妹であつた故ヨセフの祖先を書けばマリヤの祖先が自然に分かるからである。

キリストは處女から生れた故甚しい人はイエスを姦淫の子と言ふ併しキリスト教は始から終まで奇蹟なる故、奇蹟を信ぜざる人は、此教を學んでもだめである。奇蹟は科學と衝突しはしないと思ふ。何となれば、科學とは物界の諸則を研究するもので、宗教的奇蹟は、絶對無限の世界についての事であるから、人間の最初、即ちアダム、エバには父も、母もない。故に新人たるキリストに父がないと言つても不思議ではない。

化身と言ふ考　神は人となつて我等を救ふことが出來る。神が人と成り、人の間に住むとは、萬民の

古からの信仰で、それがキリストに依つて事實化したのである。彼によつて神が人性となり、人と同じ境遇に入つて我等の如くなつて、人類を贖ひ、救ひ玉ふたのである。神の子が人の子となり給ふた故に罪もおかさず、我等全人類の代表者となり、凡ての人の罪を自ら負ひ給ふたのである。

モーリスは大變神の化身といふ説を主張した。人間の本性の中に、神が人と化するならば、人性は高くせられる。罪の人性は神と合一して初めて尊くなる。勞働者にも、貧者にも皆樣の子となり得る性がある。社會改造の秘義否、原理はこゝにある。人性が神化せらるゝ故に、勞働者も自重しなければならぬ。

キリストの名。三つある。

(イ)キリスト、ギリシャ語で膏注がれたものとの意識名である。王や祭司は油を注いで任命される。メシヤとも譯す。救世主と同じ意である。

(ロ)イエス、ヘブル語で救の意、ヨセフは夢に告げを受けて「其名をイエスに名づくべし蓋その民を罪より救はんとすれば也」即これが本名で罪より救ふとの意である。

(ハ)インマヌエル、(神我と共にあり)神と人間の差別を著しくし、人は神に近くべからずとする宗教が多いが、キリスト教はこれに、反對で、神は我々の友、救主慰藉者、として我々に近くゐますとの眞理を教へて居る。

ナザレ生活。誕生から、受洗迄凡そ三十年位であらう。猶太人は三十歳にならねば、成人として認められぬから、多分イエスの受洗された時は三十歳位である。ヨセフは彼の二十歳位の時に死し。四人の弟妹があつて、ヨセフの死後家を嗣いで十年間勞働をし玉ふたイエスの教育は、小學校位で、自然が學校であつた。沈默の中に大準備がされたのである。

施洗者ヨハネ。イエスはヨハネを指して精神的にエリヤの出現だと言はれた。バプラスマは初は、只身體を潔める意であつた。ヨハネに到つて、異教か

ら、ユダヤ教に入る儀式、即罪を悔ひ、新生活に入る、意となつたが、キリスト教になつては、更に靈的更生の意味と化し、新しい生涯に入る記號となつた。

イエスの受洗。 何故にイエスは洗禮を受け給ふたか無罪の彼にとつては悔改の意ではない。ヨハネは是を拒んだのである。而しこれは新任の儀式としての任命式であつた。此時から主は、劃然として使命に向ひ、宣傳に從事し給ふたのである。三章十六節には「イエスバプテスマを受けて、水より上れる時、天忽ち之が爲にひらけ、神の靈、鴿の如く降りて、其上に來るを見る又天より聲ありて、此は我心に適わが愛子なりと言へり。恍惚として心が天に走りしかも内に大きな力を感じ玉ふたのである。イエスは、神の示現であるが、自制し給ふて居た。此時に當り神に愛せられてる神の子の自覺を更に新にし給ふたのである。我愛子とはメシヤの意である。我々も亦全精神を神に捧げる時に、始めて、神の大きな力のある聲が聞えるのである。

野の誘惑。 大きな事業の前には大きな誘惑が必要である。かうして强くせられるのである。イエスも神の靈を受けて直ぐに荒野に行き給ふた。パウロも主を見た後直ぐアラビヤへ行つた。サタンは一種の形を現してイエスと問答をした。第一生活問題、第二名譽心、第三權力、野心これ等についてイエスは誘惑に勝ち得て餘りある答をなし給ふた。惡魔或はサタンはバビロン人の宗教思想である。歐洲大亂以來實際惡魔の存在を信ずる者が多い。猶太人の宗教は嚴格な一元的一神教であるのに之は二元的ではないかとの疑問を受けるがユダヤ人は決してサタンを神と對立せしめたものではない。

以上はイエスの誕生、生立、受洗について述べたのである。然して次にイエスの宣傳、奇蹟、豫言、苦難、復活に就いて順次述べるつもりである。

（梗概筆記在文責記者）

身の装ひ心の装ひ

阪本花代

美しい田舍の秋を味ふ暇もなく、毎日青年會に通ひ同じ生活をくりかへして居る樣ですが、電車の中では色々の人を見るにつけ色々の感じを與へられ、學ぶ處も少く御座いません。

1　或る朝込みあつた電車の中にすいた處が有るので、其處まで行つて釣り皮を持ち度いと思つて進むと、行李を眞中に置き、鼠色のつぎはぎの着物を着たお爺さんがあぐらをかいて、友人らしい腰をかけた職人風の人と、聲高らかにお話をして居つた、其の天心爛漫たる樣子には皆ほゝゑまずには居られませんでした。

2　或る日電車の中で知人の主人に會ひました。某會社に勤めて居る人、背廣洋服の襟と袖口が茶色になつて、さまで古くもないのに、何だか古ぼけて見えました。少しこれに手入れをすれば新しく立派に見えるものを此の人の奧樣は日本の裁縫には通じて居られるが、此處までお氣が付かなかつたのかとつく〴〵御婦人方に洋服の手入れの講習の必要を感じました。

3　電車の中や外で見る子供の洋服の型はともかくも、下着の調つて居ないのにはがつかりします。洋服のみならず、日本服の美しい着物是には當世流行のゴム靴までは、宜しいが腰掛に上つたり下りたりする度に足の奧の方まで見える時は、お母樣の御心づくしの御召物も品格を下げる樣で、子供の下着にもつと注意して完全なるものを日本服の下にも着

せて頂き度いといつも思ひます。

此の三つの秋の觀察談の中で一は昔のまゝの質朴を表し、二と三とは文化生活の一端は表はれて居るが或る物の缺けて居る事を表して居ります。私共は人間として社會に住む以上は服裝にも充分注意しなければなりません。服裝の美しく調和して居る樣に我が心も淸く美しくあつて欲しいものです。西洋の文化生活の一部のみ採用して居る例は澤山ございます、一例を擧ぐれば洋行歸りの立派な御方にも、先づ服裝住居は西洋風まる寫しですが、西洋の社會の根底をなせる宗敎の方面は頓と無頓着な人が多い樣に思はれます。願はくは外觀を採用すると同時に、眞髓の美點を逃さない樣にして欲しいものです、靑年會の力もなき、一人の働き人として、つく〴〵外觀の採用されて居ると同樣に、內容までも現今採用されて居つたら、事業は今よりも、もつと〳〵盛になり、單に靑年會のみならず、他の社會事業もさぞかし、盛な事だらうと感じます、私共は女として身の裝ひも華飾に流れざる限り美しく淸楚に、此れにも勝りて心の裝ひは一しほ美しくすべきです。地上から私共の姿は去り行くも、永久に殘るのは私共の魂心です。嘗て昔親しかつたが境遇を異にし六七年間全く消息もなかつた一友人の永眠の報を最近人づてに聞いた時、友の姿はかすかにおぼろげにしか覺え出されませんでしたが、其の人の信仰や思想は鮮に覺え、神の御旨とはいへ、若くて惜しい事だと、

逝きし友を又新しく思ひ出で
乾きたる眼にも涙は湧き出でぬ
去りにし友を思ひ出でゝは

と思はず口ずさみました。

神の御業で天地は四季美しい裝ひをします。此の自然の中に住み同じ神の御惠みに浴する私共は、これにも劣らない樣に、消えざる朽ちざる私共の心魂をお互に磨きつゝ日々進み度いと思ひます。

海外時報

中歐學生救濟事業

萬國基督敎學生が中歐學生救濟事業に今迄に着手しました所は十一の異つた方面で、百二十の大學專門學校に於てゞすが、是等の大學には凡そ二十五方の學生が居り、其中には八千人の露國避難學生をも含んで居ます。スイス、佛國に於ける此仕事は、全く外國からの避難學生の間に行つて居るのです。

役員は主に有志者です。多數の學生は救濟品分配の爲に時を捧げて居ます。役員は世界的でオーストリアに於ける働人は、墺、蘭、獨、南亞弗利加、英、アイルランド、スコットランド人などで、ポーランドでは波蘭、米、カナダ、スウエーデン及英人で、ハンガリーでは、ハンガリー、米、愛、墺人で、獨逸では、獨、米、ノーウエー及英國人です。そして少くとも役員の半數は婦人です。

救濟を受ける人はよく調査してこれを受くる必要のある人は民族とか團體とか、信條とかに何等關係なく、眞に助を要する人に與へられるやうになつて居ます。

是が財源はオーストラヤ、カナダ、支那、キユーバ、デンマルク、エジプト、フインランド、フランス、ドイツ、英國、愛蘭、波蘭、印度、伊太利、ジヤマイカ、日本、ラテインアメリカ、ニユージーランド、ノールウエー、ポルトガル、ロシア、ペスイン、セルビア、南アフリカ、スウエーデン、スウイス、米合衆國、などから或は團體を通して、或は個人を通して學生其他の人々に訴へ募金を得て居ります。此仕事は昨年八月スウイスに於ける世界學生大會で卅九ケ國の代表者が一致して開始したのです。それで本年の夏迄にスウイスのお金で三百三萬四千百三十五フランス集りました。

昨年の八月から本年の夏まで一ケ年間にされました仕事としては、コヽア、パン及朝食を墺他利の學生約六千五百人に又夕食をウキンナの學生六百人に

與へました。米國フレンド組合によつて開始された獨逸學生を養ふ仕事を、本同盟は今年五月十五日から受繼いで、以來約二萬人の學生に每日一日に一食づゝ給與して來ました。米國救濟會は、補助食として一日一食づゝオーストリア、ハンガリー、チエスロバキヤ、ポーランド及バルチック洲の學生四萬三百六十人に分配して居ます。でつまり。每日六萬七千人の學生が養はれてゐるわけです。

是等定まつたものゝ外、コヽア六十三トン、コンデンスミルク九萬三千五百鑵、燻肉五千三百キロ、豚油七千二百キロ、メリケン粉七千六百ロキ、砂糖一萬七千キロ、鹽漬牛肉一萬四千九百キロを分配しました。又、着物三千二百五十枚、スウエター四千六百着、外套千八百五十枚、靴足袋一萬九千足、長靴四千九百足、其他下着に手套に新しいもの或は古いものを數多分配しました。

此外獨ワルソーに六七百人の學生を容得る三つの家をつくり、プラーグには七百五十人の學生を入れ得る建築を今や學生自身の手のみで造る事を着手しました。又既にある宿屋へ寢臺や毛布其他の入用品を分けることも昨年十一月にいたしました。プラーグには學生醫療所を設けました二百五人中四十人の肺病人がありポーランドでは百二十名の學生肺病者を夏一ケ月間療養所に送ることになりました。國々により特別の場合に於ける病者への注意が拂れ食物藥品を與へて居ます。

以上は物質的方面のみを述べ來ましたが、道德的精神的結果ははるかに物質的に量る物より以上のものがあります。本年の最も大な仕事は四十一ケ國民が饑と失望に煩める同胞を、救ふ爲に美しい精神をもつて一致なし得た事です。此一ケ年の仕事は學生の好意、犧牲、奉仕の念で民族を超越し國境と言語と信條政治的怨恨とを離れて各國人間に友情をつくり得た偉大な行動であります。

此仕事はまだ終りません千九百廿一年から一千百二十二年即來る一ケ年間の豫算は十二萬弗で御座います。(K、O、)

島の乙女

村岡花子譯

一

四邊は物の見分けも附かぬ位に暗くなつて來た。遙か彼方の地平線のあたりまで擴がつて居る平たい沼地の世界には刻一刻と夕暗が押迫つて來た。所々に杉の木が立つて居るのがぼんやりと眼に映る。やがて陸地も水も、寄せて來る夜の帷の陰にすつかりくるまれて仕舞つた。枯葉を搖ぶる風の音と、びしよ〱した水の中の築道を走る車輪と馬の蹄の音とより他には何一つ響はなかつた。

馬を走らせて居た少年は停馬場でマーチから銃と旅行鞄を受取つてそれを其のガタ馬車の上り口の所に結き附けてから其の時まで一言も口を開かなかつた。マーチの方でも自分一人の思に忙がしく、矢張無言の儘であつた。毛裏の上衣にくるまつて、腕を組み合せて、骨身に染み渡つて來る此の沼地の寒氣に蹲り乍ら、背中を丸くして座つて居た。時々パイプに火を點火るので手を出すが、指先に突き込んで來る冷い空氣に怖けては大急ぎで厚い手袋の中に其の手を差入れるのであつた。

其の烈しい寒さの中で車を御して居る少年の荒れた小さな手は風に吹きさらされる儘で、手袋ははめて居らなかつた。とうとうマーチの方から口を切つて寒くはないかと問ひ掛けた。

「いゝえ」恥かしさから來る附元氣か、或は苦勞に馴れて居る貧乏人の無感覺からか、少年の答に誠に素氣ないものであつた。

マーチは親切に又尋ねた。「少つとも寒かないの？」

「えゝ」

「斯ういふ氣候にすつかり身體が馴れちまつたんだらうな？」

「えゝ、然うです。」

マーチはパイプに火を點火るので燐火をすつた拍

子に横眼で少年の様子を盗見した、同時に相手の灰色の眼は燃え立つた火の中でチラリとマーチの方に向つて光つた。次の瞬間、二人は又も元の暗黒に包まれて仕舞つた。

「君はヘロルド君の息子かい？」

「えゝ」と素氣なく答えた。

「幾才だね？」

「十一です。」

「中々大柄だね。僕は君のお父さんつていふのには逢つた事はないが、やつぱり何かね、倶樂部の方に住んでるだらうね？」

「えゝ」聞き取れぬ位の低い聲であつた。

「君とお父さんと二人つきりだらうね？」

「えゝ」と言つて置いて、又直ぐに絞り出したやうな調子で、「それに姉さんが居ます。」

「姉さんがあるのかい？」

「えゝ」

「そりやあ可い。そんなら色々面白い事があるだらう」とマーチは元氣よく話したが、其の間には何の返事も聞えて來なかつた。

何時の間にかパイプの火は消えて居た。

マーチは其の灰を振り落してから、パイプをポケットに入けてしまつた。暫くの間二人は默々として居た。マーチは暗闇の中で何か見ようとして左右に眼を動かすのだつたが、何も見える筈はなかつた。

「君は餘程此の邊の通には明るいと見えるね。僕にはあの小つぽけな汚ならしい鼠色の星が遠くの方に見えるつきりで其の外にや何も見えないよ。」

「馬がよく道を知つて居ます。」

「そりや安心だ。これからどの位で會館に着くね？」

「あと半マイルです。あそこがラトラー灣ですからね。」

「どうして分るんだ？何ぼ君でも眞暗闇で物が見えるわけぢやあるまいにね？」

「どうして分るんだか僕は知りません。」

少年の聲は冷淡だつた。

マーチは笑ひながら「五感といふけれど、君なんかには第六感まであるんだらうな。
君は何ていふ名だつけね？」
「ジム。」
「年は十一だつて言つたね？もう直きに鐵砲が持つてるやうになるね。生きてる野鴨を打つて見度いだらう？」
「もう澤山打ちました。」
マーチは聲を出して笑つた。「そいつは豪氣だ。ジミー君。鐵砲はどんな工合だつたい？脊負ひ切れたかい？」
「父さんの鐵砲は僕にや少し重すぎますから、僕が使ふ時には隠場の縁の所に凭せかけて置いて發砲ます。」
「隠場から發砲のかい？」
「えゝ」
マーチは微笑を含んだ儘、再び元の沈默に返つた。五分もたゝない中に彼は色々と他の事に考を走せて居た――此の泥のやうな島の所有主は五人の金持で其の五人が倶樂部を組織して居た。つまり島は倶樂部の財産になつて居たのだ。段々に株を放す人や死んだ人があつたので、今はマーチ一人の所有となつて仕舞つた。何故他の人が株を放すのに、自分ばかりが買込んで居るのか、マーチ自身にも其理由は分らなかつた。鴨獵などに大した趣味も無い彼は五年間に一度も倶樂部の方へ足を向けた事はなかつた。それが何故今年は斯うして一週間の狩獵に出て來たのか、それにも大した考のあるわけではない、唯醫者が何處かへ休みに行く事を勸めて、別に此處ぞと思附いた所がなければ「あの妙な家へでも出かけて來たら如何か」と此の倶樂部を指して言つたのが元で此處まで來たのである。
斯ういふ事情でマーチは二月の或夜を此處に旅して居つたのだ。目的の會館も近くなつて來た。泥地を越えた向ふから燈火が見えて來た。吹き渡る東風は島のかなたの大西洋の茫々たる波に吞まれて死ん

で行つた人々や難船した船の、恨の聲にも似たやうな潮の遠鳴を耳に傳へて來た。

「ヤレ〳〵御苦勞だつた。僕はねジム、あんまり寒いので迚も身體が持つまいと思つた位だけど無事だつたね。君は凍えちまやしないかい？」

　少年は恥かしさうに笑つた。其の中に馬車は臺所の窓口から一筋長く引いて居る光の道の中へ走り込んだ。マーチの身體は寒さにかじかんで居た。けれども其大儀な身體をやつとの事で馬車から出した。同時に臺所の戸が開いて一人の婦人の姿が其處に現れた。——それは丈のスラリとした若い娘であつたつひ今しがたまで料理をして居たのであらう、指先を拭き拭き戸口の階段を下りて來て、小さな日に燒けた手をマーチに向つて差し伸べた。

「唯今弟にお部屋へ御案内させます。食事も直ぐに仕度が出來ますから」

　マーチは娘に一禮してジムから鞄と銃を取つて、自分の爲めに用意せられてあつた部屋へ案内して貰つた。部屋は極く簡單な物であつた。壁と言つたら黄松で張つたきり何も塗つてはなかつた。椅子が一つ、それに洗面臺と寢臺、其の外には衣類を掛ける爲めに釘が二三本打ち附けてあつた丈けだ。フォーム嶋狩獵倶樂部の金持連は、兎角狩獵地で豪奢な生活振りを見せびらかす富豪への當附けか、此處へ來て居る期節中は出來る丈け簡易に質素に暮すのを例として居た。それで部屋なども極く粗末に造つてあつた。

　斯ういふ理由でフォーム嶋倶樂部の會館は木造の二階家の極めて質素な建物であつたが、扨て其の島は狩獵地としては其の近邊第一の場所で、此處の媒鳥と言つたなら、他に並ぶ物が無い位、金を掛けてよく馴らしてあつた。

　マーチは凍えた指先や顏を氷のやうな水の中で洗ひながら、頻に倶樂部に近代的の便利な設備のないのを惜しんで居た。然し臺所の方から來る美味しさうな匂で寒さと冷たさの不愉快は大分減らされて居た。やがて危つかしくギヂ〳〵言ふ階段を踏みしめ踏みしめ下へ行つて大きなストーブの前に陣取つて食事の知らせを待つて居た。（つゞく）

誌友の欄

投稿歡迎　締切毎月十五日

○ 青島　島村愛子

當地青島には敎會が二つございます、兩方とも神の福音のために働いて居られますが、まだ〳〵なすべきことは多くございます、當地には何等の社會事業なく胸にあまる苦しみを神に慰安を求めつゝも、つかみ得ないで苦しんで居られる多くの姉妹を見その御話を伺ふ毎に、女子青年會の様な機關があればとつく〴〵思ひます、學校時代に正午は青年會、矯風會のために祈る様定められて居りました、其習慣が家に歸りましてもやめられず、又一生涯つゞけたいと思ひ、心掛けて居りますが、此頃は特に當地の若い方々のために御惠あるやうに、又女子青年會のお仕事を當地にまで延ばしていたゞける様に祈つて居います、

外人は隨分支那人のために働いて居られます、又支那人は大層熱心です、もうやむにまれぬ信仰の熱を胸にわく〳〵させながら一心に平信者が牧師を助け神の國の福音を述べ傳へて居りますのを目擊する時に、なんだか

穴にでも入り身をかくしてしまひたいやうに思ひます」

○ 梅花女學校青年會

先日は河井先生には御忙しい中をわざ〳〵我梅花女學校に御光來下され有益なお話をして下さいました事を深く感謝致します、あの內容及びその一言々々は凡て、ともすれば神を離れ動物的な自己主義にながれ易い私の心をそゝのかして、神の御前にへりくだり、又本當の意味の平和について考へさせられました。そして靜かに自己を離れ祈りました時、一層の感激と共鳴とを覺えました。只今私共會員の胸には、ピース、ピースと紅の水が高鳴つて居ります、そしてそのために出來得る限り働かうと願つてゐますことも恐らく先生方の御想像以外でございませう、私共は又此夏修養會に參られ、親しく本部の有様にお接しなされた椿先生から詳しく本部の御様子を承り會員一同どれ程喜び、感じ、祈り、御同情申上げたでございませう、又物質上にも本部では御心配の様に承りまして、私共は奮起

し『凡て汝の手に堪ゆる事は進みて事任せよ』と心から願つて居ります。でございますから遠からず我々の努力の結果をお目にかけたいと思つて居ります。それから又當今は大阪市部と連絡をはかる爲にも色々計畫中でございます。多分來月あたり實現するでございませうから其時又詳しい様子を御通知申上げます當會々歌も今製作中でございます、出來上りましたなら一つ皆様に歌つて頂きたく存じて居ります。

○ 東京　加古家壽子

東山莊の生活がほんとうに、私にどんなに、內面的な、變化を與へた事でせう。然し時々私は私の心が私をうらぎるのを感じます。おゝ其時、『私はどれ程悲しみをするか知れません。私の頭の中に其時、修養會へ事がもつと强く出て來ます『御殿場へ何しに行つて！私の耳にこうしたさゝやきが致します時私はキリツトなりますけれども〳〵また同じ様な悔をくりかへす、事さへ御座います。私は祈ります『たゞ祈る外どうすればよいのかわかりません。

あの充たされた日を感謝の中にまた思ひ出してゐます。ともされた光り、私はそれを風に消される様なことなく、自分自身消える事なき光になり得るまでに行くのがほんとうだと存じます。

稍ともすれば、たほれさうな私に、ほんと

に迷なく一すじの道に、進む事が出來ます様御導きのほどお願ひ申上げます。

○

早天に祈り靜かにする心たゞしみじみと嬉しかりけり

朝夕を祈に送りこれの世にわづらふこともなき一日なり

ゆたかなる惠を思へ陽ははれて笑む山々よ鶯のこゑ

いひがたき思ひいだきて來し草に陽はかゞやきていきれたつなり

悔多き日を夜をなげくこれの身にあな有難き御言葉をきく

かくてまた都に歸る日となれば山の草にも別れがたしも

○　新潟　上野俊子

前略〕昨夕私は母の命日で家に歸りました田舍はすつかり秋深く、稻は多方かられました。都の方々にお目にかけたいと思ふ美しい夕陽を時々見ます中略皆様の御活動に比しては、今は勿體ないほどの靜養で御座います、家は松とアカミヤの林の中にある洋館で海へは十分とゝいふ山の上にあります。近かければ青年會の幹事諸姉をお招きして、只今頃ならば梨や無花果を御馳走いたしたいのに……四時には仕事が一くゝり終りますと無花果を取つて來て頂きます。

私は只今語る友もなく全く一人です。ほんとうに是は私が長く求めた生活てした。孤獨の尊さを心から感謝して居ります。親しい友と共に居る嬉しさを味ふて來た私には一層この寂しい然し深い孤獨が、尊いのです。きちんと步みゆかんと落着いて十月から步き出して居りますが、是を續けるのに、祈の時がほんとに入用なのです　時々海邊に（北海の海は殊に秋は深刻です）ぢつと座つて考へてゐますと、種々と過去の事をまとめて暗の中から「魂の日出」への道を紹介してくれる樣に思ひます、人と語る以上に敎へられ、强められます。許されたる此松林の中に小さい奇麗な家を作つて一人で考へたり、祈つたり、讀んだりして傳道して行きたいなど〻過ぎる事を思ひます。

○　山梨　ますゑ子

今まで何一つ悲しい出來事に會はず、實に幸福な平和な日が長く續きました。

突然神は私の上に父の死といふ、大な一つの悲をお與へになりました。それと一緒に、其悲に堪え得る力をも給つた事は、何といつて感謝してよいか分りません。私は今度位熱心に日夜祈りつゞけた事はありません。父の病の進むにつけ、只、朝に夕に祈りました。

九月八日……それは貧しい一つの靈が温かい天父の御下に召された日でした……其朝までも、何も知らぬ人の子は「御心ならば一日も早く癒し給へ」とそれのみ祈りました。其日の午後六時半秋雨の寂しく烟る夕刻、極く親しい四五人の人々にみまもられて、眠る樣に安らかに逝きました。生れて始めて臨終の場にのぞんだ私は、只夢の樣にぼんやり、人々の騷ぐのを見てゐました。寢卷の上からジツト見つめて居ると、どうしても息づいてゐる樣に思はれて、幾度顏を掩ふた白布を取りのぞいてみた事でせう。末子の一人娘に生れた私は、人一倍父に愛されて來た丈に、悲みも大きう御座いました。若し神を知らずに此の悲みに會つたなら、どんなになつたらうと幾度考へた事でせう。

母校の先生から新聞で父の死を知つたといつて一番先に、長い〳〵お手紙を頂きました。其の中には沈んだ寂しい心に、光をあたへる聖句が御座いました。「悲みに遇ひしは我に好き事なり」幾度味つた事でせう。たゞ悲んでゐても仕方がない、外の人々に慰を與へねばと思つた時、私の心はやつぱり祈より外ないとひたすら祈りつゞけて居ります。こうして悲しみに逢ふにつけて、神を知つた事のどんなに大い幸福であつたかゞ、一層はつきり分りました。

私の小さい胸に植え付けられた信仰の芽のこんなにもしつかり成長してゐた事を感謝せずには居られません。此感謝の心を自分一人で味ふばかりでなく、まだ神の惠を悟り得ない人々にわかちたいと今はそれのみ努めて居ります。

東京基督教女子青年會報告

會館改築も十月十日頃落成の餘定が長雨の爲二週間餘り延期、それかとて諸集會及び諸組を中止するわけには參りません。不自由、騷音、不行屆の中に進行させました。既に東京市ウーマンスクラブ、婦人平和協會、牛込教會四十五年紀念會、濱松高女同窓會等諸團體は引きつゞき集會されました。今度體操場兼集會場は五百名を有に收容し得られますやうになりましたからよき方法にて御利用下さいますやうに。二階の應接間に窓掛を新調しました。今迄よりもつと生命のあるやうに室内が引きたちます。ミスロバートソン・坂本幹事及有志の方々が毎土曜日會館にて製作されました厚意を感謝してゐます。此部屋では七十名位の方なら親しい御集りが出來ます。

資金募集

改築費　經常費一ヶ年分不足及事業擴張費等合計金貳萬圓を目標に十一月九日より十五日までの一週間を募金週と定めました。方法として小口は十枚の受取書を一回とした三角形の小帳面を作りました。各受取書のうらには大正十一年の日曜表がついてゐます。一冊の擔任者をきめ一口卅錢以上。一冊で三圓以上出來ます。小口では三千五百圓を得たい豫算。大口としては二圓以上一千圓。これが準備の爲左の諸集會を開く。十四日午後會員招待會河井先生御話
十六日學生を主としたる禮拜勝部武雄先生御說教、
十八日市內牧師招待會(六十名出席)

此の募金に多大の援助をもて、木曜會(十二三人の婦人の集り)より金一千圓の寄附を初穗として得ました。感謝と勇氣をあたへられました。

クラブ總會。十月十日體操場を會場にして第一回總會が開かれました。二百の椅子は五列に並べられた卓に配置され各自其のクラブを表す爲に趣向を凝した各々の卓裝飾が出來ました。午後六時。前田市助役、志立會長同令孃、後藤勸業銀行秘書。時事報知讀賣の婦人記者、其他の來賓方が右端の卓に付かれ

ました。食後直ちに前田助役の御挨拶に代て有益な御奬勵がありました。七時から十一の會が各自の目的計畫を發表し希望に燃えて横澤先生の御話を伺ひました。工事なかばの會場は荒壁さへまだ塗られて無つた北側に足場の棒が無遠慮に出てます。大幕を張つて是を掩ひ度いと考へても天井の高い處は如何とも仕方がありませんでした。然し是れさへ或る意味から言へば、骨組だけ、足場丈の出來たてのクラブとしての第一回總會を具體化して居る感がありました。

多くの豫期と希望とに添へて皆様のお祈を乞ふ次第で御座います。

横濱女子青年會報告

○教育部　長らく狹隘を感じつゝありし教育部は九日の新學期と共に從來寄宿舍なりし三階左側全部を和洋裁縫室、タイプライター室及び其他教室に當て他の一部を全部寄宿舍となし、其の結果秩序上組織上教育部及び寄宿舍兩者のため好都合を感じつゝあり。

西洋料理の組　十月十四日より開始、教師はミセスチャンバレーン、出席者二十二名倘入學者ある見込

西洋裁縫　本會員特に夫人クラブ會員の希望により來週より開始

教師會　本月下旬第一回教育部教師會を開き種々の問題の打ち合せ且つ相談をなし後親睦會を開く豫定

クラブ(イ)有職婦人クラブ。十月七日例會を開きミセス、ビヤソンのヲランダに於ける有職婦人につき力ある御話あり、後同クラブを年齢により二種に分くる相談ありき、次會に於て贊否決定の豫定。

(ロ)ルキズクラブ十月十日例會を開き恰も上京中なりし織田ヤス先生の「眞の自己を見出すには」の題の下に有益なる御話あり後、クラブ基本金のためハンケチを造りぬ。

(ハ)十月十四日例會を開き法律家波野平氏の婦人法律につき御話ありき、同氏は本會のため少なからぬ

同情と了解を有せらるゝ本會の恩人なり。會後ミセスクルガルーの子供洋服につき實際的の御話ありたり。

〇工場　(イ)程ヶ谷富士紡績會社にては同會社に於ける本會の事業に對し大なる同情を有せしが本月本會の要求を心よく受け入れ多大の遊戯道具買入の事承諾ありたり

(ロ)愈本月より當市生糸檢査所に宗教及び娯樂の働きを初む。同會社工女三百名。以上。

神戸女子青年會報告

本會にては此秋の好期に於て溢れる計りの恩寵を受けて居ります、新らしく與へられた幹事方も古い職員も共同して一日の短かさを嘆ずる程忙しく働いて居ります。

英語の組々は申すまでもなく、西洋料理、小兒服裁縫、編物の組等多くの新らしい姉妹方が來られます、又絞染講習會を近日開く筈になつて居ります、過る七八九日には當地に於て日本基督教會大會が開かれそれに御列席又其爲の講演會に御話をなさる爲河井總幹事が御來神になり、會館に御滯在にて或は晝の組禮拜に夜學校禮拜に御話をして頂き一同喜びました。

九日には御殿場修養會出席者一同が河井先生と晝食を共にして其當時を思ひ出で共時なしたる決心を新にする事が出來ました。

大會開會中會館は牧師方の會食或は地方より出席されたる方々の爲に有益に使用された事を感謝して居ります、會館は益々狹隘を感じますがそれがいつも一杯になる事が感謝です、新らしい大きいものも望みますが常に神の爲社會の爲有益に用ひらるゝものになり度いと望んで居ります。

只今本部のミセス、ウツドが工業狀態研究の爲當地御滯在中です、當地には工女の爲の働を希望して居りましたので同氏の御研究の結果その事業が當地に於て始めらるゝ樣祈つて居ります。

秋期皇靈祭日には新幹新入學生の歡迎會を兼ね十數人にて再度山登りを致しましたしと〳〵降る雨の中ありもしない松茸を探したのは誠におかしい事でした、山の上にて好きな讃美歌など歌ひ持參の辨當を開いて親睦しました。

天長節にも何か面白い催をし度いと計畫中です。

京都女子靑年會報告

九月歸京後早々一同は會館の移轉問題で可なり多くの時を費し適當なる家の與へられん事を望んで居りましたが幸にも思ひがけず早く只今の場所を得、以前の家よりも一見して會館らしく八十八人程も容易に收容し得る部屋もあり位置の上からも萬事に好都合にて今は一同落ちつき感謝に滿ちて仕事に從事して居ります。此秋の計畫の一つは來月中旬にバザーを開催する事に決しクラブの會員も各組の生徒も幹事も暇さへあれば皆ハンカチをこしらへたり、人形の着物を縫たり、一番よく賣れそうなものを語り合つたりして準備に忙しくして居ります。教育部の洋裁組、編物組、西洋料理等は目下滿員の狀態で缺員の知らせを待つ人々の多くあるやうな有樣です。この月から新しく開く英語唱歌組へは大坂からミス、スタインメッツに一週に一回づゝ來館を願ひ三十人の大きいクワイヤを造る考です、又近々に朝鮮の婦人等の便宜を計つて日本語教授の組を數組設ける考にて只今その準備中でございます。

十月十三日の午後は河井總幹事の神戸よりの御歸途御立寄を願ひクラブや組々の人々に聖書研究の必要につき最も有益な御話があり急に開催いたしたにもかゝはらず五十四人の若い方々が集り、信者未信者の中から聖書組に入り度い新しい申込者の多くあつた事を喜んで居ります。

左記へ轉居

京都市一條通室町西入る

大阪基督教女子靑年會報告

○社會學講話　既報の如く毎週土曜日午後四時より五時迄島村育人博士を聘して目下哲學史の講演を學びつゝあり。出席者は毎回十三四名に過ぎざれども皆熱心に規則正しく出席せらる。

○コーラス　毎週土曜日午後三時よりミススタインメッツ指導の下に練習を續けつゝあり。二十名内外出席。日曜午後は特に聖歌の練習をなし廿三日の日曜日よりクリスマスの歌を練習の筈なり。

○會員有志修養會　十月十五、十六、十七日の三日間市外東天下茶屋幹事住宅にて開催す此度の企は會員の發企にかゝりしものにて時間割、講師への交渉等の諸準備も殆全部會員の有志盡力せられ幹事は唯注意と後援とを與へしに過ぎざりき。十二三名より二十名程の出席者を得「如何にてし信仰を實生活に適應すべきか」との題目の下に武本喜代藏先生及プール女學校々長ミストリストラムの御講話を伺ひ間には郊外散策、讃美集會、懇談會等をも企て、心靈の啓發と相互の親しみを増す爲とに益ある會合なりき。

ウヰルミナ女學校青年會報告

西野先生朝鮮傳道の際依頼せられて朝鮮淑女學校出身、サイギジュンをウヰルミナ女子青年會から學資を援助して本校に入學することを校長初め全會員は賛成した。

本校第四學年に進級。

基本金を募るため毎月第三水曜日には特にスクールデーを設け各人の克己した金を献金す。

三月より初め追々成績は良好である。

矯風會の依頼を受け手拭三十反を賣捌いて居る。

青年會賣店報告

賣店部を三部に分ち第一部は學用品、雑記帳、墨筆類、第二部糸類パン第三部、草履、(校内使用のもの)各部の得た利益の幾部分を朝鮮人の學資に供して居る。

賣上價額は漸次高額をしめ益々大繁榮。

京都同志社女學校青年會報告

靜かな秋がまた訪れて來ました。みやびやか京都の秋景色は紫おびて澄み切つた空氣に包まれて日々秋の深みへ進んでまゐります私達の同志社女學校女子青年會も神の惠の御手に抱かれて一歩一歩大きく生長して居ります。弱くとも小さくとも心からの熱心な祈りで私共の會はもつと意義のあるもつと盛んなものとなる事を信じつゝさらに强い信仰と新しい努力とでこれまであまり振はなかつた私達の青年會の面目を一新したいと努めて居ります。此夏の御殿場での修養會から色々の方面に於て理想への導き努力への力を與へられて私共の祈りには一層の熱が加へられとう／＼希望通り同志社女學校女子青年會は普通學部と專門學部との二つに分たれました。それまでの色々な不便と繁雜が一掃されてそれからは神のお助けにすがつて各々は思ふがまゝに益々生長發展して行くやうにとこの姉妹の青年會は助け合ひとも／＼に新しい理想への道へ進んで行きたい又出來る丈私達自身が働いて多く顧問の先生の御手を煩はさないようにしたいとつとめて居ります。新しく生れ變つたような氣持で會の內外を一新したいと思ひ協議に協議をかさねて居りましてまだ實際に何事もなして居りませんが會のために有用に使用の出來るお金を得るために專門學部青年會では文具の賣店を普通學部青年會はパンの店を開く事になりました。毎日よく賣れて忙しうございますそれらの店が一人青年會のためばかりでなく生徒の皆さんに便利なものとなつて非常に喜ばれて居ります。其の外普通部の方では毎土曜日に例會を開いて小數の出席者ではありますが皆熱心であります。只今では只お仕事だけを設け毎水曜日の二時から四時まで御手玉ハンカチーフ、手帖等を作つて居ります、專門部の方では此頃開かれる會合は重に事務的でありますが追々宗敎的、社交的の會合を開いて會員相互の信仰を堅め

ると共に親睦を計つて行き度いと望んで居ります。又十一月頃からキャンパスデーを開きたいと計畫中です。

美しい古都の秋に新しく生れ變つて出ました同志社女學校の姉妹青年會の健全な生長と發展の爲に皆様の熱心なお祈をお願ひ致し度う御座います。

會計室より

雜誌代前金切のお方々へ、先日端書で御通知申上て置きましたが、何卒御記憶下さいまして御面倒ながら至急御送金下さいますやう御願ひ申上ます。

誤訂正廣告

神浦靜夫辯護士の廣告中電話番號芝五千四百四十二番なるを今春三月以來三番となり居たる旨注意を受けました故でゝに訂正します。

萬國基督教女子青年會祈禱週に就て

祈禱週目録がまだ本部へ參りません爲に本紙上に掲載する事が出來なかつた事を殘念に存じます。いづれ他の方法で御知らせ申上ませう。何卒十一月十三日ら十九日迄の一週間を最も意義深い祈の週として、世界的愛の火に燃える週として過す特權をお重んじ下さいませ。

祈禱週負擔金一人に付金拾錢これは御承知の如く倫敦の本部へ送るものです御記憶下さいまして郵便切手で結構で御座いますから一月末日までに會員の方々は其地方の市青年會へ市部のない所の方は直接東京神田錦町一丁目十六番地へ御送り下さいませ。

中歐救濟金第一回送金をしましたのに付左の樣なお禮狀が參りました。

拜啓七月廿五日日附の御手紙に添へ七千三百七十七スウヰスランセス御送附下され誠に有難く御禮申上候思ひもならぬ時、しかも財政困難の爲支拂に窮せし折柄とて殊の外嬉しく頂戴いたし申候

既に御聞き及びの事と存じ候が此冬の計畫として露西亞救濟の爲には今迄よりも更に豫算は膨脹することゝ存じ申候

御親切なる義捐金を受くる歐洲學生に代つて日本の女學生諸姉に感謝いたし申候何卒よろしく御傳へ下され度候萬國學生の救濟事業は大なる力を得物質的の勵しはもとより精神的にも缺乏せる學生にとつては大なる賜に候御厚禮申上候　早々

コンラード　ホフマン

中歐學生救濟御寄附金（第五回報告）

金四圓五拾錢也	東京女子青年會聖書之組（東京）
金貳拾八圓也	札幌女子青年會（北海道）
金貳圓也	高松高等女學校（香川縣）
金拾圓也	梅田高等女學校（大阪府）
金六圓也	八幡實科高等女學校（岐阜縣）
金拾五圓也	女子英學塾職員（東京）
金貳拾五圓也	青山女學院（東京）
金參拾圓也	山梨英和女學校青年會（山梨）
金拾七圓也	樂藝會より

計金壹百參拾七圓五拾錢也

累計金參千四百參拾貳圓九拾七錢也

（大正十年十月十八日迄ノ分以下次號）

本部會計報告

金參拾圓也		夏期修養會に於ける本賣上利益
金拾壹圓五拾貳錢也		夏期修養會に於ける賣店利益
金拾貳圓也	（本部維持費但大正十年度分）	山田千代子
金壹圓也	（本部維持費として）	松本豊子
金五圓也	（同）	松岡鐵枝
金貳拾五圓也	（同）	河井道子
金四拾圓也	（同）	ジエン、スコット
金貳拾圓也	（御寄附金）	ミセス、ジョーダン
金五圓也		フエリス
金五圓也		アームストロング
金貳拾五圓也		カフマン
金貳圓也		大平絹成
金貳拾五圓也		キャレン、アレン
金貳拾五圓也		ヴエリー
金拾圓也		マグレーガー
金參拾圓也		ワイザー
金貳拾圓也	（本部負擔金）	横濱女子青年會
金貳拾五圓也	（同）	東京女子青年會
金五圓也	（河井總幹事御車代として）	東京府立第一高等女學校高等科生一同

【消息】

□河井道子幹事、二週間信州北陸を經て神戸の日基三十五回大會に出席し去る十四日歸京す。

□ミセスウッド、工事部幹事の同氏は關西地方視察の爲、本月中旬出張す。

□川戸環夫人、本部委員たる同氏は日基大會の爲神戸に數日旅行されたり。

□羽仁もと子氏、東京女子青年會委員なる同氏は十八日神戸武德殿にて基督教婦人大會主催の、基督教婦人大會にて大阪ウイルミナ女學校の西野貞子女史と共に講演せられたり。

□修養會　大阪女子青年會は十月十五日六日七日の三日間天王寺幹事宅にて小修養會を開催したり

□藤島杜代子氏　東京女子青年會體育部に活躍さるゝ同氏は東京市内小學校體操教師の講習會に於て七回講演及實習をせられたり

□井上秀子氏　日本女子大學校教授の同氏は十月二十二日渡米さるゝお目的は婦人の活動、社會運動觀察及家政科の研究など主にさるゝ由、猶婦人平和協會の理事長たるをもつて華府大會にも出席されん。

□新井田鶴子　麻布御新宅に於て本部幹事數名を招待せられたり。

□ミスカンパース、横濱雙眞女學校長なるが同校にては氏の爲に十月十七日に頌德式を擧行せり。猶近き内に一ヶ年間米國に歸らるゝ由。

□支那男子青年會。十月上旬に創立十五年記念會を開催床次内相及米大使ヲーレン氏の講演ありたり。

□男子青年會　萬國青年會創立者なるサーウイリヤムの百年記念會を全國の青年會一齊に十月十五日に擧行し奉仕大運動をなしたり。

□ミスカパカ　支那女子青年會總幹事なる同氏は重患にて手術を受けられ經過よろしかりしも肺炎となり十月十四日上海にて逝去されたり、氏は米國に於ても有數の婦人指導者として常に内外人よりの尊敬を受けたる人物なり。支那に於ける六十餘人の米幹事は皆同氏の力によりて決心したる者なりとぞ。かゝる指導者を失ひたる中華民國青年會に赤心よりの哀悼を現す。

□米國觀光團　十月十八日米國加州より百八十名の東洋視察團上陸し横濱市の歡迎を受けたり。當日横濱女子青年會幹事は接待役を依頼されたり。

□教役者會　東京女子青年會は十月十八日東京教役者三十四名を招待し加藤幹事は東京青年會につき河井幹事は青年會一般について報告をなし晩餐を共にしたり。來會者いづれも赤心よりの好意を表し本會の將來を祝されたり。

□織田ヤス子氏　組合教會三十七回大會の爲上京され靈南坂教會にて婦人大會の講演を安井哲子女史と共にせらる。

□海老名みや子氏　京都女子青年會の委員たる同氏は十月中旬一週間組合教會大會の爲に上京されたり。

□藤本孝子氏　本誌愛讀者の一人なりし氏は七月十二日御逝去の旨御父君より十月五日報を受く謹んで哀悼の意を表す。

○江原　一代　朝鮮羅南本町
○田村　道子　香川縣香川郡立香川實業學校内
○榊原　末子　大阪堺市宿屋町中濱
○榊原ふく子　大阪堺市宿屋町中濱
○大草千とせ　大阪府下西成郡玉出町一一

以上五名の方々の轉居先不明につき御存知の方は御報せ下さいませ。

新刊紹介

アッシジの聖クララ（二階堂眞壽著）

先生の三年間の御苦心によつて集められた材料からクララ其人を史實に基いて丸彫にせんと試みられたもので流暢な文章と精選された挿繪と凡てのものゝ後に輝き燃えてる著者がクララへの憧は讀む者を同じ火に燃やし美しい高い世界へ伴れて行つてくれます。フランシス傳が多勢の人々に愛讀されますが彼によつて一層聖化し美化し遂に彼に力を與ふる者となつたクララの完成された傳を今日手にし嬉しくも吸ひ込まるゝやうに讀みました餘白がないので多く書き得ません。感じのよい本です皆樣の座右の友にお友達への送物に好い書であることを躊躇なく申します。

定價は一圓三十錢で發行所は東京牛込區神樂町二ノ十一叢文閣です

サンタヤナ哲學的三詩人（小島茂雄著）

小島先生は多年サンタヤナ研究を專心にされ、彼の著書全部を我國人に紹介るす時機を待つて居られましたが今や時機來れりとし其第一卷が出ました。卷頭にサンタヤナの紹介が丁寧にしてあり日本現代の思潮を論じ、彼が行く手を照す一盤たらん事を示してあります。哲學的三詩人、ルークリシアス、ダンテ及ゲーテはサンタヤナの慧眼のレンズを通してよく批評されてゐます。哲學的宗敎的考究熱の盛にならんとする今日殊に多くの人々は何物かを得んとして追求して走つて居る物の世界に滿足してゐた人も靈の世界にのみ安定を求めてゐた人も兩者ともそれに滿足しないで何處かまだ行きつく處を探して居る其人々は本書に於て一つの暗示を得らるゝことゝ信じます、定價は三圓で麹町區隼町二十番地濟聖堂から發行されました。

○女子青年界御購讀の皆樣へ

雜誌は只今迄實費以下で御分配申上て居ましたが印刷代も紙代もお高い折柄とて來年一月より一ヶ年前金二圓一册二十錢に定價を改正いたします。一册は事實上毎月二十錢にお願ひ致して居つた次第です右御諒察のほどお願ひ申上ます。（K、O）

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度、前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵税共

	内地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料

一回掲載	
一行	金五拾錢
四分一頁	金五圓
半頁	九圓
全頁	金拾五圓

年極又は回數により割引有

大正十年十一月廿八日印刷納本
大正十年十一月一日發行

發行所 神田區錦町一丁目十六番地 日本基督教女子青年會
電話 神田三六五二番 振替東京二三七二五番

發行兼編輯人 河井道子
神田區錦町一丁目十六番地

印刷人 前川吉次郎
芝區[illegible]田和泉町七番地

印刷所 合資 三成舍 社

to attend was greater than the teachers could manage. Thirty are enrolled in cooking and singing and seventeen each in knitting and sewing. The other classes are steadily increasing in numbers, but the enrollment is not yet complete.

The Association is to hold a bazaar on the 19th of November and the various clubs, classes and members are all busily engaged in preparations for it. The girls are making two hundred handkerchiefs to be sold, besides many other things. Each Friday a group meets to sew at the secretaries' residence.

A new evening class is being started for Korean women with the object of teaching them the Japanese language and customs and bringing them into contact with Christian Japanese women. Mrs. Yamagata, who formerly lived in Korea for several years and became very much in sympathy with foreign women, is to be the class leader. The number of Koreans in Kyoto is steadily increasing and there are now said to be two thousand of them in the city.

The foreign secretaries in Kyoto recently moved to a Japanese house on Muromachi Demizu Agaru. The new residence is only five minutes walk from the Association and classes which cannot be accomodated at the Association rooms can easily overflow into the residence.

Miss Edna Wiser has been appointed to Kyoto for her second year of language study and is giving her spare time to the Kyoto Association.

The Association, being near the church which was convention headquarters, was used a good deal for hospitality by the delegates. The women delegates frequently met there, had lunch there, or rested at the noon hour, while one day a group of Auburn-graduate pastors had a lunch-reunion, and the Association gladly furnished a postcard on which they wrote their combined greetings to a former teacher! Miss Kawai stayed at the Association Building throughout the Convention, where her presence was in itself an inspiration.

The first Board meeting of the fall was held on Monday the 10th with nine members present, and eight secretaries. After a talk by Miss Kawai on the education of Board members, calling for an all-day conference for them, there were various reports of old and new work, and the decision, since the activities have grown so complex, to organize departments of the Board. As a begining, the President was authorized to appoint Chairmen for Religious Work, Finance, and Neighborhood Work Departments, the total number in each to be three or more. A special committee was also to be appointed to raise funds for an Association piano. At the close of the meeting Mrs. Roy Smith spoke of a Community Christmas for all of Kobe, funds for which she has brought back from America. Though including on the committee people from all Christian organizations of men and women, Mrs. Smith's hope, to which the Board heartily agreed, was that this plan might be promoted through the Association, as the inter-denominational centre at which all could meet. There was an informal welcome both for her and for the new foreign secretaries.

The membership of the Association is still growing, being at present 549.

KYOTO

The Kyoto Y.W.C.A. has recently moved into very attractive new quarters in a building owned by the Presbyterian Mission on Ichijo Muromachi Nishi Iru. The new quarters consist of a very large room which can be used for meetings, parties, or a gymasium, and two smaller rooms, one of which is called the Educational Room and the other, the Club room. The larger room overlooks a garden, which adds much to the attractiveness of the place.

Miss Kawai recently visited the Association and gave a talk to the older Club and class girls on Bible study. As a result, at least two new classes are to be formed. 33 girls attended the meeting, which was the first large group gathering in the new building.

It has been found necessary to limit the enrollment in the cooking, sewing, knitting and singing classes, as the number of those who wished

allowed to attend the Gotemba conference. Eleven were finally admitted to the Kobe delegation, which included five employed workers. and all had a wonderful time at the conference. One of the first report meetings was the regular gathering of the Mokusei Club on September 13th, when Miss Hirabayashi, the club president, gave a splendid description of the conference, her talk lasting for an hour and a half.

Another conference which benefited all the employed workers was the annual staff meeting at Hakone, where group discussion was the central emphasis, and from which the results have already appeared in the first two staff meetings held in Kobe. In these meetings, each lasting an entire half-day, all the workers have been freer than ever before to express their thoughts, and their contributions have been valuable parts of the finished plans. We are very happy over this development of group participation in the Association planning, and hope it has come to stay, to insure larger and better work than ever before.

During the summer, Miss Yamamoto, the Public Health Nurse, was in charge of the Association, gave health talks to the emigrants, who came frequently and in numbers, and entertained the business girls and others who dropped in for sociability. Her regular work is beginning from October.

Miss McGregor and Miss Chappell, our new foreign secretaries, arrived in Kobe with the other workers (all seven of whom were at Hakone) on September 13th, and received a hearty welcome, which is continuing ever since in various manifestations. Miss Takahashi, whom we hoped to secure as religious work secretary, was obliged for family reasons to decline the call, and the place is still vacant.

The new house of the foreign secretaries' is at 133 Yamamotodori 4-chome (Suwayama Onsen no Ue.)

Mrs. Wood, Special Worker for the Industrial Committee of the National Committee, arrived in Kobe on Tuesday the 11th and is enthusiastic over the prospects and about the constructive Christian public officials who have welcomed her investigations into the industrial situation here.

Miss Kawai was in Kobe from October 7th to 13th, at the National Presbyterian Convention, which celebrated the 50th anniversary of the founding of the first Christian church in Japan. Miss Kawai was one of the speakers of the convention, and besides, made wonderful evangelistic addresses at churches and other centres, including three at Association chapel hours. The Gotemba conference delegates had a lunch-reunion with her on the 9th, and Monday the 10th she gave to the Association work.

our assembly room is well filled, first with the chorus, then with the Sociology class. A school group and a Sunday afternoon hour with sacred music (other than hymns) are under way and others are being planned. A number of girls from the Umeda Government High School where Miss Ragan teaches on Thursdays are coming for Miss Steinmetz's work.

And Osaka at last has a secretaries' residence! After two bitter disappointments last spring and summer, we have "the best yet," the eighth house looked at this fall and worth waiting for. It is 50 minutes from the Association, but we had despaired of finding anything nearer, and the good air and quiet in this suburb well repay the journey to reach it. More and more of the other foreigners of Osaka are coming to live in this vicinity just beyond Tennoji, and many of our members also. We think a branch work may be developed in this section and then our residence will be specially convenient.

Some of the girls who were at the houseparty conference last year held at a Hamadera home during the Meiji Shrine holidays asked for a similar one this year. In the general rejoicing over the secretarial home it seemed the obvious thing to have it there, making it also a housewarming. Suzumoto San from Kyoto was a welcome guest, and two Osaka girls stayed over the two nights of the conference time, Oct. 15-17, the others coming for the day sessions and recreation. 20 Osaka girls and 1 visitor attended besides the secretaries, several of them our new class members, and greatly enjoyed the pretty garden, the tea-house — Miss Ragan's special province—and the homelike rooms of the house. Miss Tristram of the Poole Jo Gakko gave the talk on Sunday afternoon, and Mr. Takemoto who taught at the Gotemba Conference spoke on Monday. The chief mover in the conference plans was Masatomi San, a primary school teacher, one of our two delegates to the Gotemba Conference, who both became Christians at that time.

The days of changing residence and a full two weeks afterwards were busier than usual because of the sudden departure of all our servants. The vacancies are filled now and much better than before, so we are the gainers. The Association building is having some much needed redecorating and it is fine to have the entire building now for adequate office and class room. Instead of the makeshift of the smaller rooms for some of the classes as at first, the lighter, airier, best rooms are now available, for the wellbeing of everyone. We are looking forward to the coming of Mrs. Wood next month and Miss Armstrong later from the national office, for their special lines of work.

KOBE

Thanks to the efforts of Miss Yuri Watanabe and the conference committee, many of the anxious would-be delegates (though not all) were

young girls have given a very eager welcome to the secretaries who will direct the work.

Mrs. Pierson of Holland gave a very stirring talk to the members of the Business Girls Club, on the subject of the working women of Holland. A business meeting followed in which there was a very interesting discussion over the advisability of dividing the club into two divisions, according to the age of the girls.

Japanese Law as it relates to Women was made the subject of a talk to the Young Married Women's Club at its last meeting. Mr. Naminohira, a lawyer of Yokohama, gave the talk and such was his interest in the work of the Association that he has offered his services to us without charge should the members of the Association need Legal Aid at any time. After his talk Mrs. Kruger gave a talk on foreign clothes for children. She brought several articles of clothing with her and gave most helpful advice on materials as well as on the making of clothes.

On the Anniversary of the founding of the Chinese Republic, Mr. Forester gave a very inspiring talk to the members of the Chinese Club on Chinese Women and the Future of China. At the same meeting Hibi San told in a very impressive way of the work of the Chinese woman doctor, Li Bi Cu.

Miss Oda, a teacher at the Kobe Bible Training School who made so strong an impression at the Gotemba Conference, spoke to the girls of the Louise Club at the October Meeting. Most of the members of the Louise Club will join the Club Leaders Class which is now being formed.

OSAKA

Osaka is very happy in the coming of Asai San as general secretary at the opening of the new season. With Miss Ragan she is busy studying the city, its people and opportunities and her presence adds greatly to the power and stability of our work. We have a special attraction in educational work in the opportunity of having Miss Esther Steinmetz for vocal training in chorus and part singing with several groups of girls. Through the co-operation of the National Committee, she will give half of her time to this work, giving private lessons the other half. At the Federated Missions Conference this summer, Miss Pider's valuable paper emphasized the present thirst for classical music among Japanese girl students, so we hope that Miss Steinmetz's present work will meet a vital desire on the part of the girls and prove of far-reaching value. Much invitation work has been done for this and for the continuance of the popular Sociology course, somewhat advanced this year, under Prof. Shimamura. Already there is a large response and Saturday afternoons

Blue Triangle Club
Harvest Club
Usen Club of Girl Reserves
Mitsukoshi Club of Girl Reserves
Fuyo Club of Girl Reserves
Star Club of Girl Reserves
St. John Club
Athletic Club
Rainbow Club
Blue Bird Club
Business Womens Club

YOKOHAMA

The Educational work has received an impetus through the additional space which has been given to that work through reducing the number of rooms used as dormitory. A foreign cooking class at its first meeting last week had an attendance of 20. Although this work can be given only as demonstration, we feel that the teacher, Mrs L. W. Chamberlain will be able to be of very real help to the Chinese and American as well as Japanese housewives who form the class. A class in foreign sewing will also be started next week and will be taught by Miss Allen and Mrs DeRaimes.

The secretaries were at home to friends of the Association on Wednesday October 19th, in honor of Mrs. Durgin and Mrs. Sneyd. The Residence at 55 Bluff is becoming the center for many social activities. Recently three parties were held there within 24 hours. Recreational work has been started by Christ Church and for the most part the meetings will be held at The Residence.

Mrs. Machii and Mrs. Sneyd have been elected to the Board of Directors to fill the places made vacant by Mrs. Omori and Mrs. Durgin, both of whom are moving from Yokohama.

A General Recreational Hour has been started for all Association Girls who enjoy folk dances and games. Miss Cowperthwaite, who is spending the winter in Yokohama, is of great help in directing this play hour which comes on Thursday afternoons.

We have great hope in the newest department of the Yokohama Work, which is the Industrial. At the Hodogaya Spinning Factory where 4000 girls are employed, the Management is giving very material help through the purchase of equipment for games. At the Silk Inspection Company near the Building on Honchodori, work will be started this week. Here too the Management has been most cordial and the 300

total of Y.3295.47 had rolled into our treasury and was straightway sent across the seas to the needy students.

A great warm feeling surges over us. Our hearts are glad for the spirit of service, of cooperation, of international brotherhood that has been so strongly evidenced. We gave but little of this world's store, but we gave much of ourselves. Strange to say, that in our giving we received more than we gave for we have learned the joy of the international mind and spirit of the Master, and with St. Paul we have learned to say: "For we are all one in Christ Jesus."

We of the Y.W.C.A. of Japan are justly proud of the response of our members to the appeal made by the World's Student Christian Federation for contributions to the European Student Relief Fund—a splendid piece of relief work, undertaken in behalf of the students of the warstricken countries of Central Europe, a work that in the doing promoted effectively the international aims of the Federation.

TOKYO

Monday night, October 10th saw the transformation of the Gymnasium into a gay banqueting hall. The occasion was our first annual Club rally. And it was indeed a success! Four long tables stretched from one end of the room to the other. There were gay blue birds, silver stars, blue triangles, rainbow streamers, fruit, flags, posters, flowers, candles, place cards-everything to make the tables bright and beautiful. At 6:30 the club girls and their guests (mothers and friends)—175 in all, marched in by Clubs, found their places and then the good time began. During supper each Club sang its Club songs, and all sang Association songs together. We were honored in having as our guest Mr. Maeda, Vice-Mayor of Tokyo, who gave a most interesting talk after supper. He contrasted the scene at this banquet with the scene down in the slums of Tokyo from which he had just come, impressing the girls with the opportunities, privileges, and responsibilities which are theirs as compared with those of these other girls and women. Each of the Clubs then told in three minutes about their own work. Miss Yokozawa, General Secretary of Yokohama Association, gave the address of the evening on "What it means to be a Club Girl in The Y.W.C.A." As the girls listened to Miss Yokozawa they felt she was talking to them individually about what they could and should be doing as Club girls. At the end of the address all sang together "Blest Be the Tie that Binds" and the first Club Rally was over.

The 11 Clubs represented were:

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

VOLUME XVIII NOVEMBER, 1921 NUMBER 11

NATIONAL

Miss Edith N. Stanton, Executive of the Office Department at National Headquarters, New York, has been visiting in Japan. After spending some time in the various Association centers, she will go to China.

Mrs. Margaret Wells Wood went to Kobe and Osaka early in October and will probably spend most of her time during the next few months in those centers, making investigations there in connection with the industrial work.

How did the Japanese girls raise their contribution of Y 3295.47 or $1647.73? The National office and the Tokyo Y.W.C.A. cooperated in putting on a large entertainment on the afternoon and evening of July 2nd. The first half of the program was classical—the assisting artists all being Russian musicians—violinist, pianist and baritone soloist. The second part appealed to the more popular taste. Here we had dances in costume given by girls of the Tokyo Y.W.C.A; a short well known Japanese farce, the "Melon Thief" was presented in English by two graduates of Miss Tsuda's School; but the main number was a negro minstrel chorus composed of fifteen young American business men, who sang the well known southern melodies with a fervor and feeling that carried the house with them. The stage setting was that of a humble little southern cabin, with familiar bench before the door. The singers in plantation costume strolled carelessly about the stage and the effect was both picturesque and realistic.

During the performances members of the Tokyo Y.W.C.A. sold iced tea and candy—others were ushers, stage managers, and ticket sellers.

In addition, on two occasions members of the national staff sold flowers at the Imperial Hotel—the large foreign hotel of Tokyo, clearing over Y.163.10.

Bit by bit, we gathered in the yen—here from a bazaar or a garden party given by students in a girls' school (over 64 such schools of high school rank or higher, all over Japan, assisted, and together raised Y.1644.86)—here from the five local Associations (Kobe, Kyoto, Osaka, Tokyo, Yokohama)—here from the contributions taken at the annual Y.W.C.A. conference at Gotemba—here from personal gifts—until the

女子青年界第拾八巻第拾壹號（毎月一回一日發行）
大正十年十月廿六日印刷納本大正十年十一月一日發行明治卅七年五月七日第三種郵便物認可